

筑後市内遺跡群Ⅷ

福岡県筑後市大字蔵数・西牟田所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第71集

2006
筑後市教育委員会

筑後市内遺跡群Ⅷ

くらかずほこていせき
蔵数保古手遺跡 第1次調査

にしむたぜにかめいせき
西牟田銭亀遺跡 第1次調査

2006
筑後市教育委員会

序

今回報告する「蔵数保古手遺跡」及び「西牟田銭亀遺跡」は、九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

九州を南北に縦断する九州新幹線ルートは、現在、鹿児島～八代間が開業されており、残る博多～八代間の早期開業のために筑後市においても平成 15 年度末より工事の着工が開始されました。

今回発掘が行われた蔵数地区、西牟田地区はそれぞれに歴史的価値の高い遺跡を有しており、蔵数地区には「蔵数森ノ木遺跡」、西牟田地区には「瑞王寺古墳」があります。本書で報告する遺跡はそれらの遺跡と近い位置関係にあるために、それぞれの地区の歴史が一段と深まるように研究材料として活用されれば幸いです。

最後に、本報告を刊行するにあたり協力されたすべての方に感謝申し上げます。

平成 18 年 3 月

筑後市教育委員会

教育長 城戸一男

例言

1. 本書は九州新幹線に伴い、平成 16.17 年度に実施した蔵数地区、西牟田地区の埋蔵文化財発掘報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理事業の関係者は第 I 章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構図は蔵数古手遺跡は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託し、西牟田銭亀遺跡は阿比留士朗が行い、遺物の実測、浄書は横井理絵が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は阿比留が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は蔵数保古手遺跡で国土調査法第 II 座標系（世界測地系）を基準とし、西牟田銭亀遺跡で国土調査法第 II 座標系（日本測地系）を基準としている。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002 に準拠している）。
SD - 溝 SK - 土壌 SP - ピット SX - 不明遺構
また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。
7. 本書の編集、執筆は阿比留が行った。

目次

I . 調査経過と組織	1
II . 位置と環境	2
III . 調査成果	
1 . 蔵数保古手遺跡	3
2 . 西牟田銭亀遺跡	21
写真図版	

I . 調査経過と組織

九州新幹線建設に伴い開発原因者である独立法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部九州建設局（以下、鉄道・運輸機構）との工程などに関する協議が平成16年4月23日に県と関係市町村で行われた。また、その後、県教育委員会との協議の結果、筑後市内域では鉄道・運輸機構の用地買収が終了した箇所から順次県教育委員会による試掘・確認調査を行い、遺構が確認され発掘調査が必要だと判断された箇所については筑後市教育委員会が本調査を行うものと合意した。それにより平成16年10月22日から平成17年1月18日まで蔵数保古手遺跡を調査し、同年4月12日から4月28日まで西牟田銭亀遺跡の調査を行った。整理報告書作成作業を平成18年3月10日に完了した。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

1) 平成16年度（蔵数保古手遺跡）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
庶務	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	成清 平和
	文化スポーツ係	永見 秀徳（事前審査担当）
	（文化財担当職員）	小林 勇作
		上村 英士
		阿比留士朗（本調査、報告書担当）

2) 平成17年度（西牟田銭亀遺跡）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
庶務	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	角 恵子
	文化スポーツ係	永見 秀徳（事前審査担当）
	（文化財担当職員）	小林 勇作
		上村 英士
		阿比留士朗（本調査、報告書担当）

3) 発掘調査参加者 地元有志

4) 整理作業参加者

整理補助員 仲 文恵 横井 理絵 佐々木 寿代
整理作業員 野口 晴香 丸山 裕見子

Ⅱ . 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域を JR 鹿児島本線と国道 209 号が縦断し、国道 442 号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

筑後市内における九州新幹線ルートは、現在の JR 鹿児島本線に近接並行して走る。平成 16 年度の発掘地点である蔵数保古手遺跡も JR 鹿児島本線の東側に位置しており、西側の八女丘陵西端には蔵数遺跡群が展開している。また、蔵数遺跡群には弥生中期末から古墳時代後期にかけての集落がある蔵数森ノ木遺跡が存在し、東側の筑後市と広川町境界には国指定である石人山古墳や、同じく国指定である広川町の弘化谷古墳が存在している。

平成 17 年度の発掘地点である西牟田銭亀遺跡も JR 鹿児島本線西牟田駅東側に隣接している位置である。西牟田銭亀遺跡の東側は八女丘陵が派生した市内でも標高の高い場所にあり、その丘陵上には瑞王寺古墳がある。

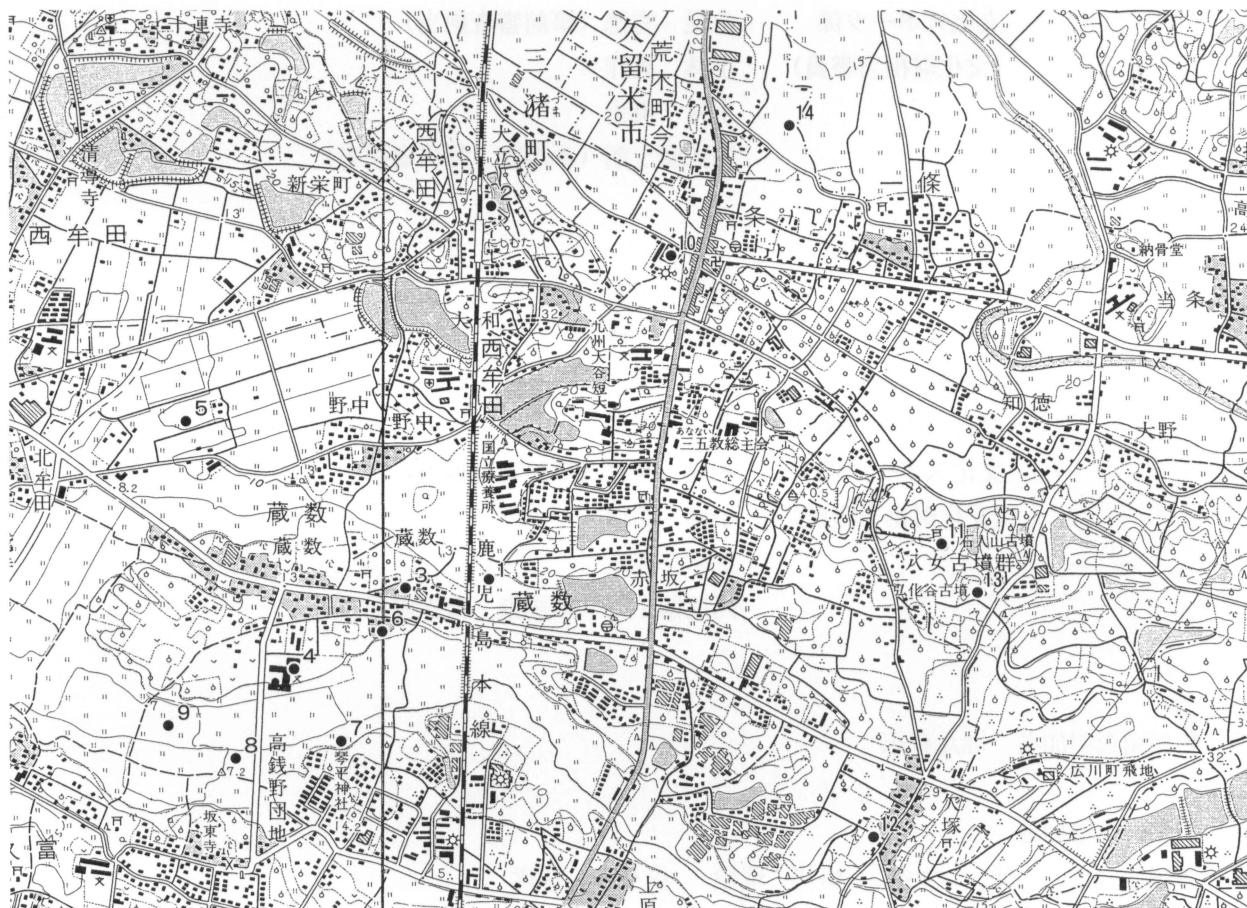


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25000)

(筑後市)

- | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|
| 1. 蔵数保古手遺跡 | 2. 西牟田銭亀遺跡 | 3. 蔵数東野屋敷遺跡 | 4. 蔵数森ノ木遺跡 |
| 5. 田佛遺跡 | 6. 熊野水町遺跡 | 7. 熊野松ノ下遺跡 | 8. 熊野宮ノ後遺跡 |
| 9. 熊野五反田遺跡 | 10. 瑞王寺古墳 | 11. 石人山古墳 | 12. 欠塚古墳 |

(広川町)

- | | |
|-----------|-----------|
| 13. 弘化谷古墳 | 14. 北の前遺跡 |
|-----------|-----------|

Ⅲ. 調査成果

1. 蔵数保古手遺跡 第1次調査

(1) はじめに

当遺跡は、筑後市大字蔵数保古手に所在しており、調査区は JR 鹿児島本線の東側に位置した南北約 130 m、東西約 12 m の面積 1600 m²弱と設定した。この調査区は、八女丘陵より西側に派生した櫛歯状の丘陵が南北にあるために谷地形にあたる。平成 16 年 10 月 22 日より表土除去を（有）徳光建設に委託し開始した。また、遺構の実測は（株）埋蔵文化財サポートシステムに、空中写真は（有）空中写真企画にそれぞれ委託した。調査は阿比留が担当し、平成 17 年 1 月 18 日に終了した。



Fig.2 調査地点位置図 (1/2500)

(2) 検出遺構

溝

SD01 (Fig.3、Pla.1・2)

調査区南側で検出された東西方向に若干弧を描きながら走る溝である。溝の規模は検出面より上面幅 1 m～2 m、底面幅 0.5 m～0.8 m、深さ 0.4 m～0.6 mを測る浅い溝である。出土した遺物は磨耗が激しく残存率が悪い。また、この溝の南側は後世の開発などによる攪乱が多くあるが、本来は南側丘陵の裾部にあたるのが土層観察でわかる。SD01はこの丘陵裾部に沿って走っており、空中写真の際にも、このSD01の続きと思われる痕跡が調査区外の線路を挟んで向かい側の丘陵に沿っていたことが確認出来た。

SD10 (Fig.3、Pla.3・4・5・6・7)

SD01より北側に20 mほどの位置で検出された。溝の規模は検出面から上面幅 2.2 m～4.5 m、深さ 0.6 m～0.7 mであるが、数回の変遷があり、また、東西に走っているこの溝は東側調査区壁より10 mほど西に進んだ所で北西側に屈曲している。その屈曲している箇所には土器が比較的集中して出土しているために溜まり状を形成していたと思われることや、もともと調査箇所が谷部に位置しているためにSD10は流路だったものと思われる。また、水の流れは東から西へと推測出来る。

SD15 (Fig.3、Pla.3・7)

SD10の北側で検出された東西方向に走る溝であり。溝の規模は検出面より上面幅 1.5 m～2 m、深さ 0.7 mほどの規模である。SD15の埋土は、検出段階では暗茶灰色土である。掘り進めると、粗い砂粒やシルト、粘質土などが互層に堆積しており、また、遺物などがまったく出土しなかった事から古い時期に形成された自然流路だと思われる。そして、SD15の北側では、この溝と同色の埋土状況が調査区内で広がっているために、谷部の一番低い部分に相当するものと思われる。

SD20 (Fig.3、Pla.8)

調査区北側で検出された東西に走る溝である。溝の規模は上面幅が東側で1 m、西側では2.5 mとなり、西側の土層では溝が2つ切りあっていることが確認された。西側部分では若干角度の変更がなされたものと思う。そのために西側の溝幅が広がって検出された。また、深さは検出面より0.6 m程である。このSD20の北側には現在同方向の水路が走っているために、溝の機能は現在の水路と同じであり、付け替え前の状況がSD20と思われる。

出土遺物

SD01 (Fig.5・6、Pla.14)

土器 (1～21)

1～6は甕の口縁部である。1～3は口縁端部を面取りしており、口縁は外側に大きく開く。4・5は鋤先口縁であり、6は「く」字状に外反している口縁を呈する。7・8は鉢の口縁部である。鋤先口縁を呈する。9～18は甕の底部である。平底タイプと中央を窪ませるタイプがある。平底タイプでは、9・14は同タイプで底径 7.6 cm～7.7 cm、10は復元口径ながら 11.0 cmと最大である。13・15・17・18は中央を窪ませるタイプの甕底部である。底径は 4.95～7.8 であり、15・18は窪みが深い。19・20は器台である。19は完形で器高 15.0 cm、下部径 6.2 cm、上部径 5.0 cmで、20は残存 2/3である。器高 14.5 cm、下部径 7.3 cm、復元上部径 6.6 cmで共に淡橙茶色を呈する。21は支脚の完形品である。器高 10.2 cm、下部径 5.15 cm、上部径 3.4 cmである。また上部面には一条溝状に施されている。土器は磨耗が激しく調整痕がほとんど消えているためにローリングを受けたものと思われる。

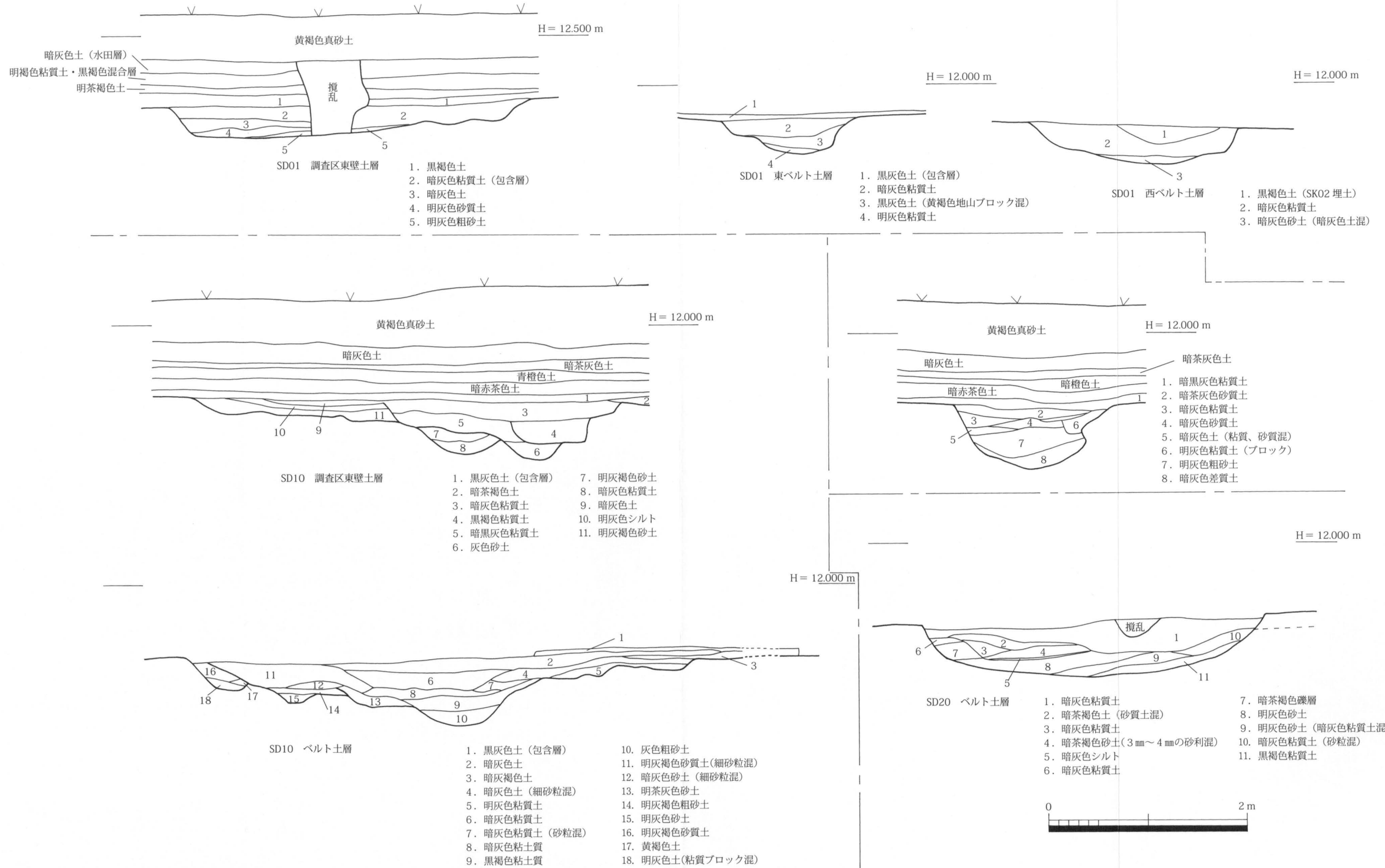


Fig.3 蔵数保古手溝土層図 (1/40)

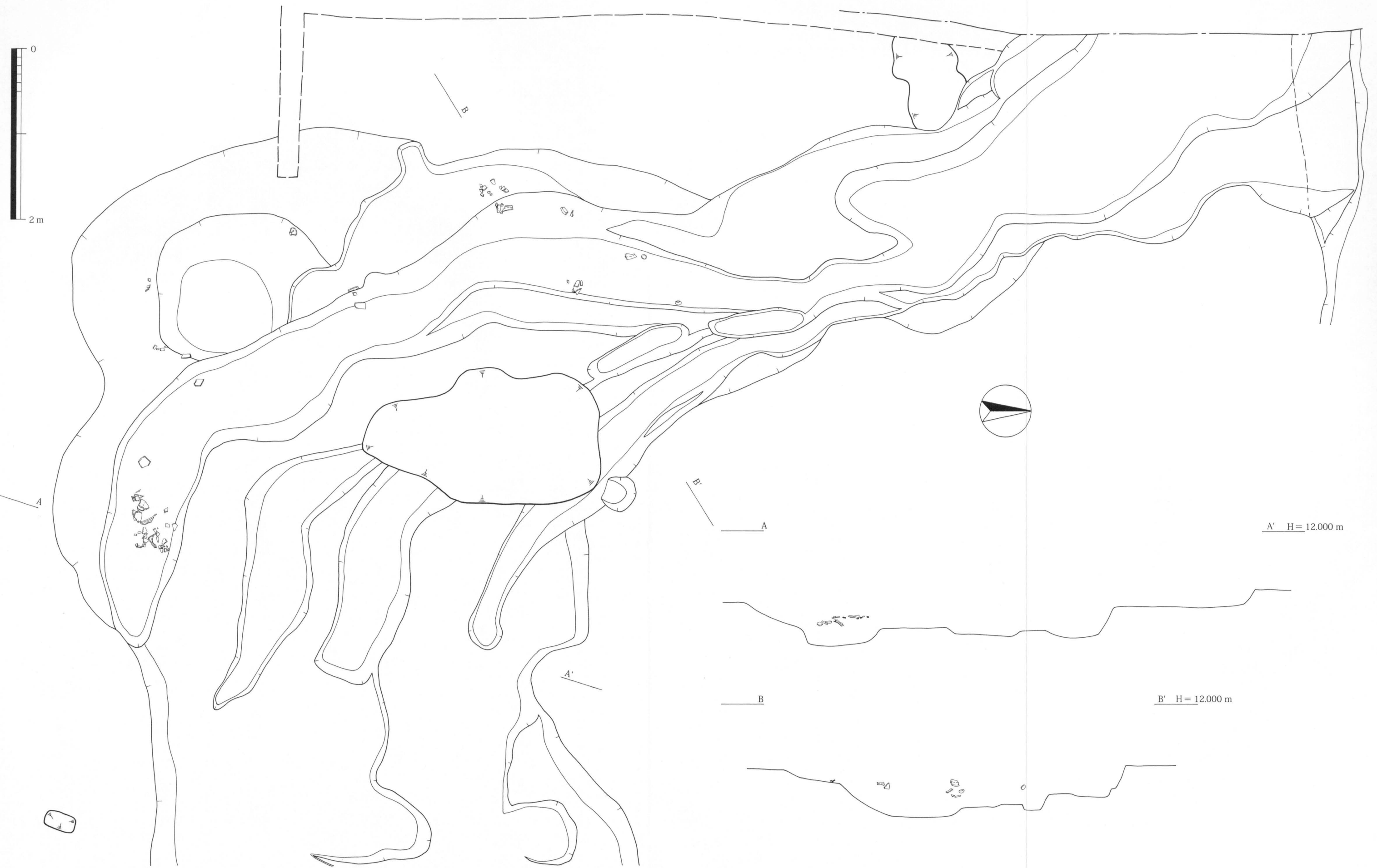


Fig.4 蔵数保古手1次 SD10 遺物出土状況 (1/40)

石製品 (22 ~ 24)

22は石斧と思われる一部である。断面が長軸5.3 cm、短軸が3.9 cmの楕円に加工しており、石材は安山岩である。23は石材がサヌカイトの五角形を呈する石器である。その一辺に刃部を作っており、また、頂上部には自然面を残す。搔器か？ 24は球状を呈する石製の不明品である。

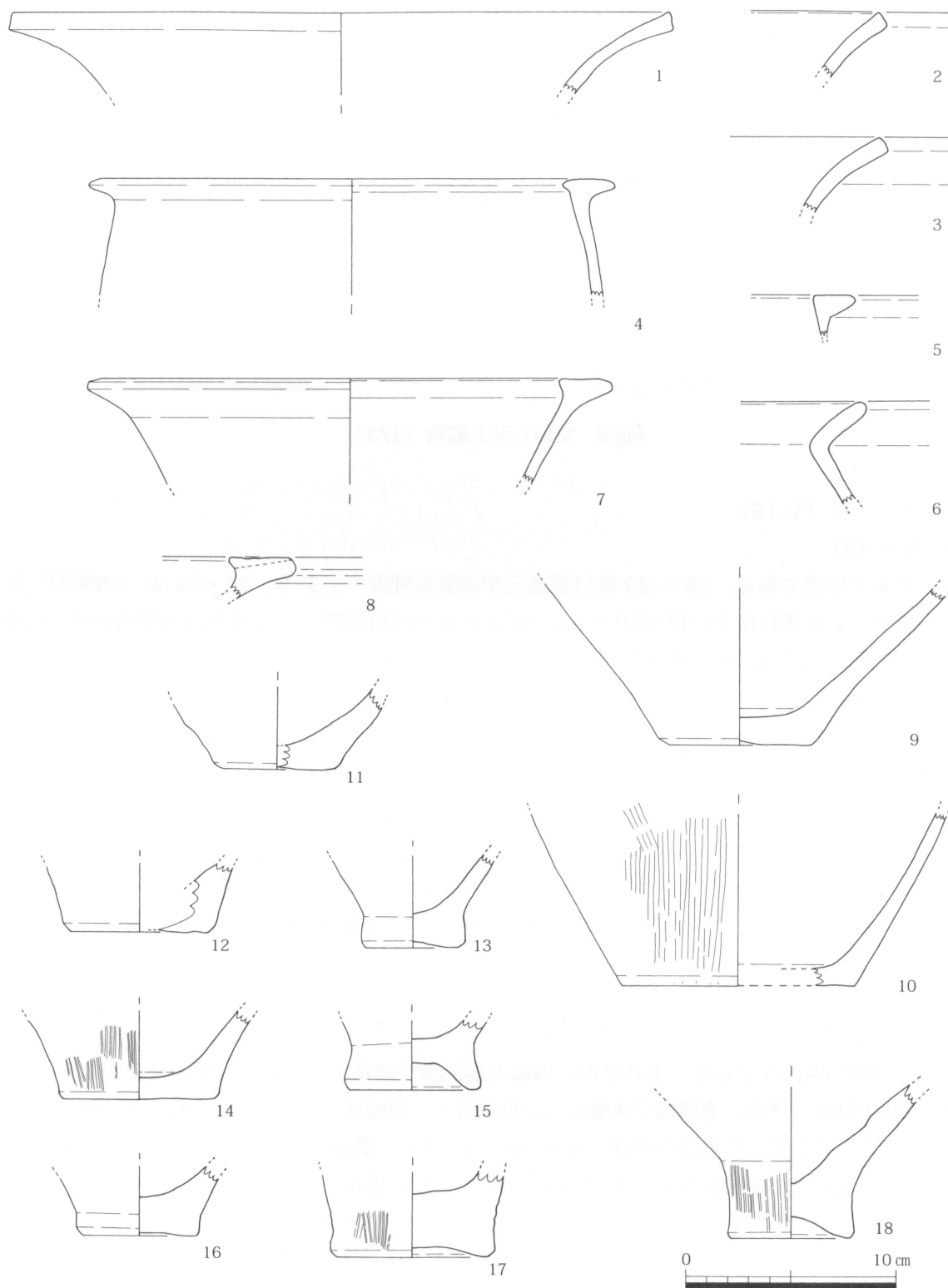


Fig.5 SD01 出土遺物 (1/3)

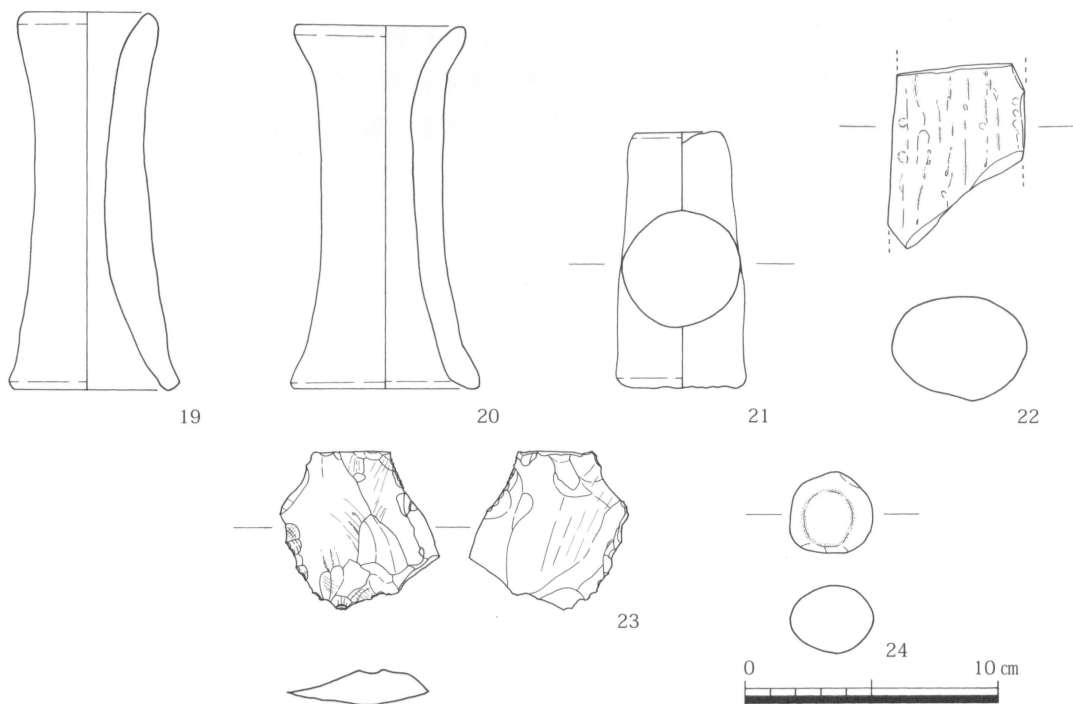


Fig.6 SD01 出土遺物 (1/3)

SD10 (Fig.7・8、Pla.15)

土師器 (25～49)

25～47までは甕である。25～29は口径復元が可能な残存率である。25・26は、口縁部が強く外反しており、それぞれ復元口径 17.0 cm と 17.4 cm で器面調整は外面及び口縁部内面は刷毛目、内面ケズリである。27は口縁部が緩やかに外に開いており、復元口径 15.8 cm である。28・29は口縁部が直立気味に立ち上がりながら外反しており復元口径は 15.2 cm、13.2 cm となる。40・42は器壁が薄く、強く外反する。43～45は口縁部が短く直立に立ち上がる小型の甕である。44は外面に煤が多く付着する。46は小型甕の胴部から底部である。底部は平底を呈しており、底部径 4.6 cm を測る。外面調整痕は磨耗によって不明であるが、内底面中央より花卉状にナデによる指頭痕を残す。47は完形品である。口径 5.6 cm、器高 4.55 cm を測る。丸底を呈しており、口縁部はつまみ上げる程度の成型である。調整は内外面ともにヨコナデ調整であり、内底面はナデである。48・49は杯である。48は復元口縁 10.4 cm を測る。磨耗が激しく調整不明。49は復元口径 15.7 cm を測る。磨耗が激しく調整不明。

須恵器 (50～53)

50～52は甕の胴部片である。それぞれ、外面の器面調整は体部下半は平行叩きを交差して行うために格子目痕を残す。また、胴部は叩き後にカキ目を施す。内面は同心円の当て具痕が浅く残って、色調は暗灰色を呈している。これらの共通により 50～52は同一個体の可能性がある。53は高杯の脚部である。脚部の底端部は直立になる。また脚部中央に三角形の透かしが入る。また、この高杯の杯身部分は残っておらず、脚部のみで見ると残存が 1/2 であり割れ口が両端とも透かしにあたる。そのことから透かしの数は四方だと思われる。復元による底部径は 10.5 cm である。

石製品 (54)

断面三角形を呈する。一方の先端部に使用したと思われる痕跡が看取される。石材は安山であり、石斧か？

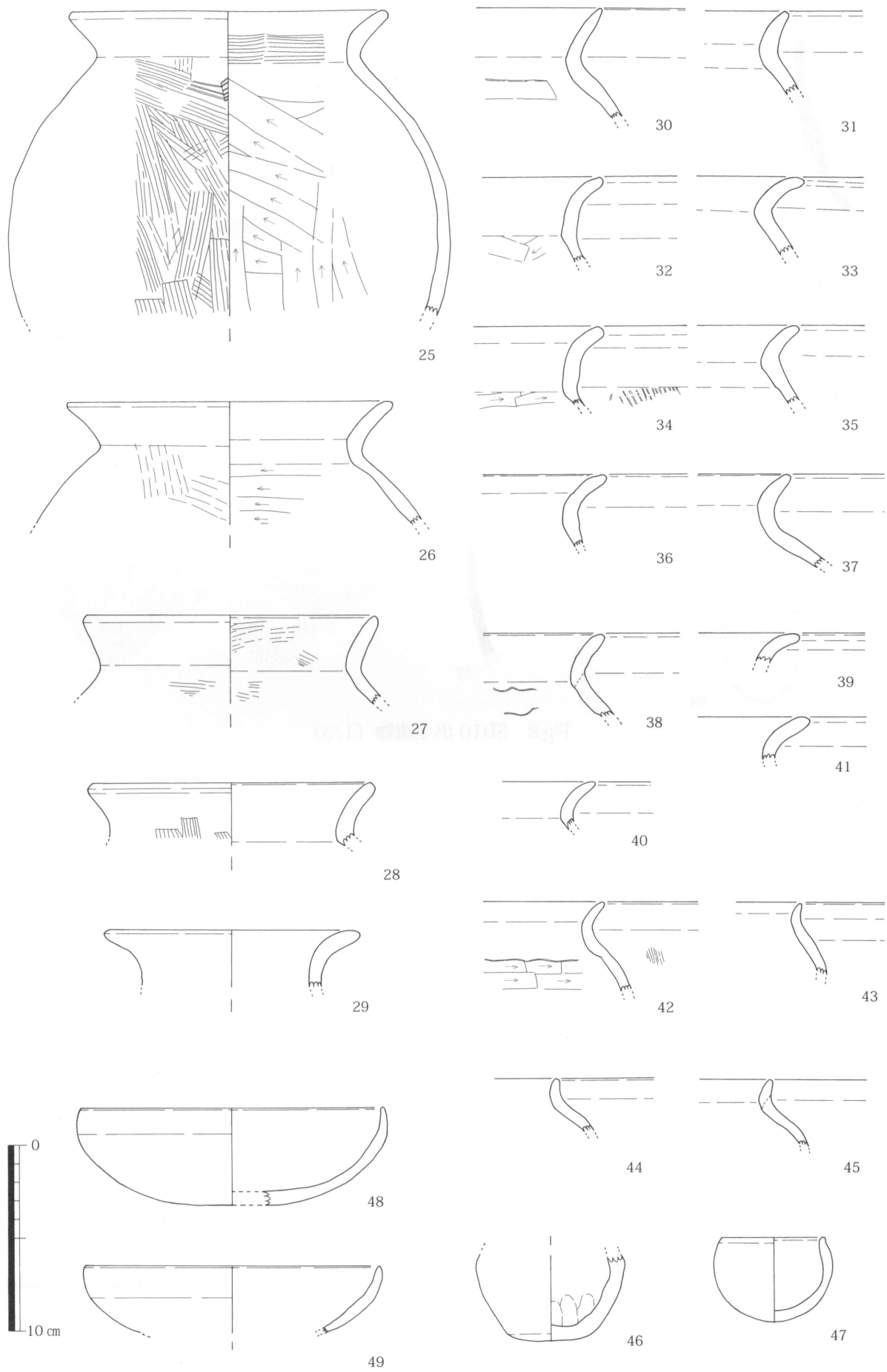


Fig.7 SD10 出土遺物 (1/3)

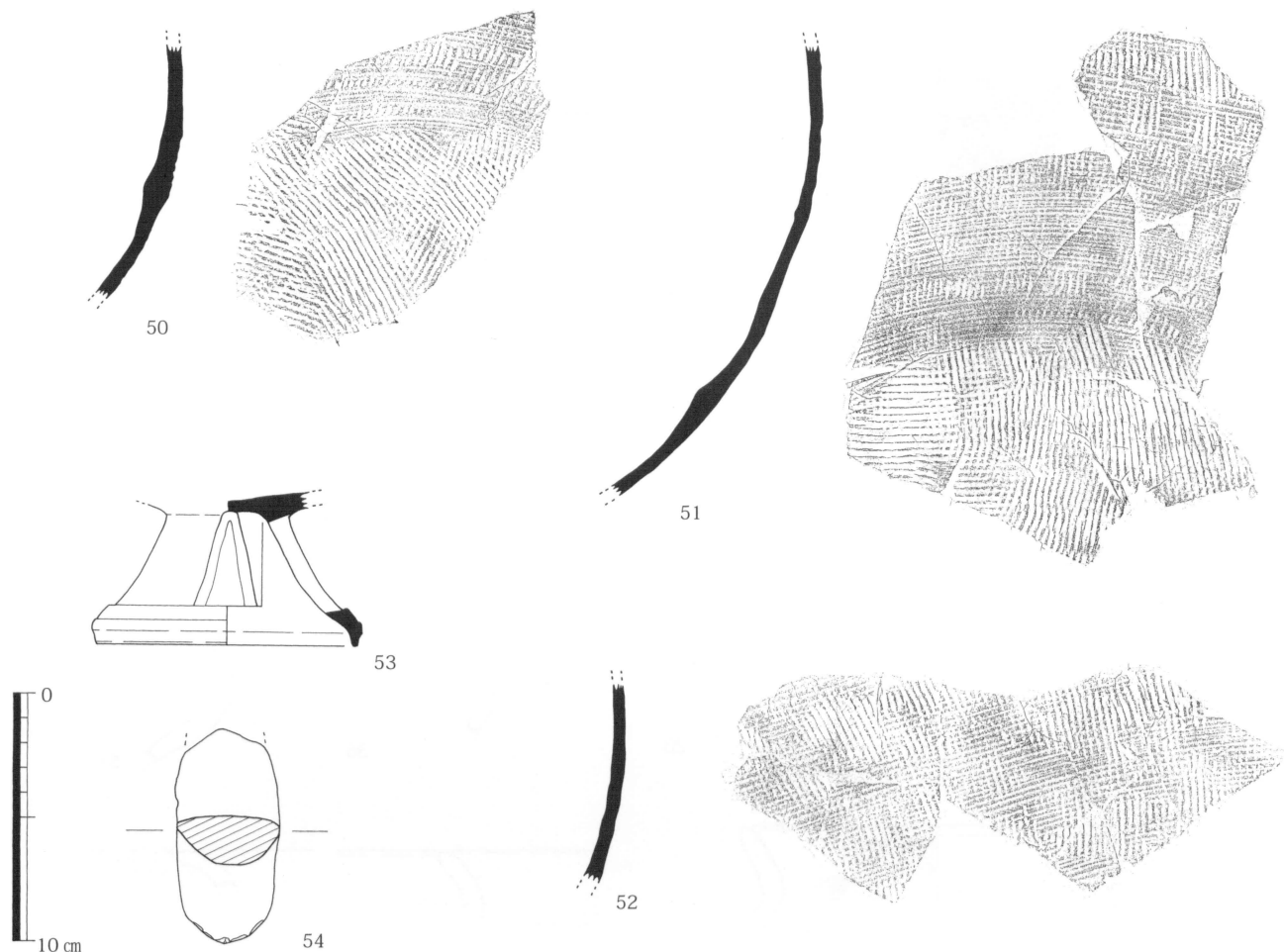
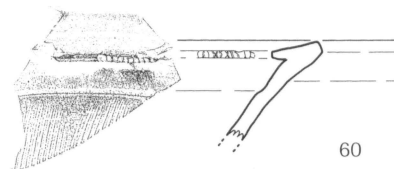
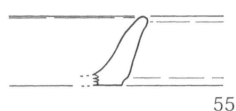


Fig.8 SD10 出土遺物 (1/3)

SD20 (Fig.9、Pla.15・16)

土師器 (55)

杯片である。器高 2.75 c m で、緩やかに外反している。色調は淡灰茶色を呈する。



陶磁器 (56 ~ 61)

56 は大宰府IV類の白磁碗口縁部片。57 は同安窯系青磁皿。58 は外面無文で内面に赤絵付けが施されている。また、その赤絵具は朱色に近い色合いである。素地は明灰色を呈する。59 は砂目積み段階の唐津の碗である。内外面に灰釉を施し、基本的に高台は露胎ではあるが、一部高台まで釉が掛かる。60・61 は播鉢である。1 単位 16 本の摺目を施している。また、口縁部内側の突帯部分には刻み目を入れる。口縁部は摺目が入る境部分まで内外面に鉄釉を施釉し、それから下半は赤褐色を呈する露胎である。底部には糸切り離し痕が残る。

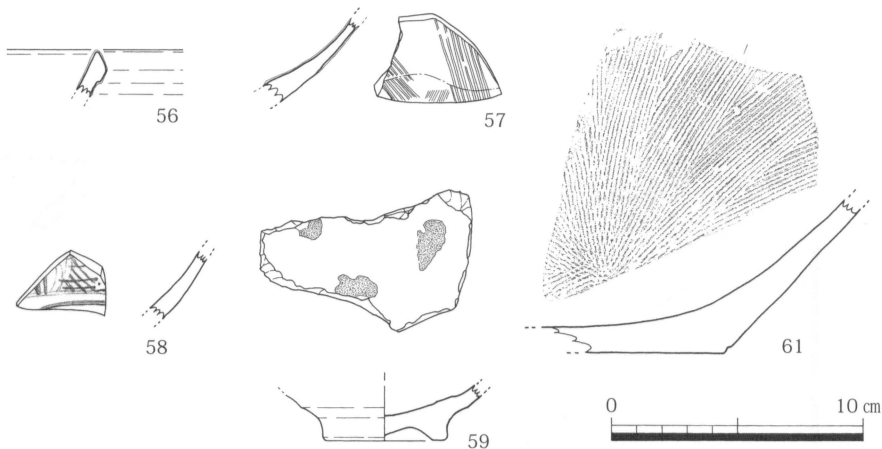


Fig.9 SD20 出土遺物 (1/3)

60・61 は播鉢である。1 単位 16 本の摺目を施している。また、口縁部内側の突帯部分には刻み目を入れる。口縁部は摺目が入る境部分まで内外面に鉄釉を施釉し、それから下半は赤褐色を呈する露胎である。底部には糸切り離し痕が残る。

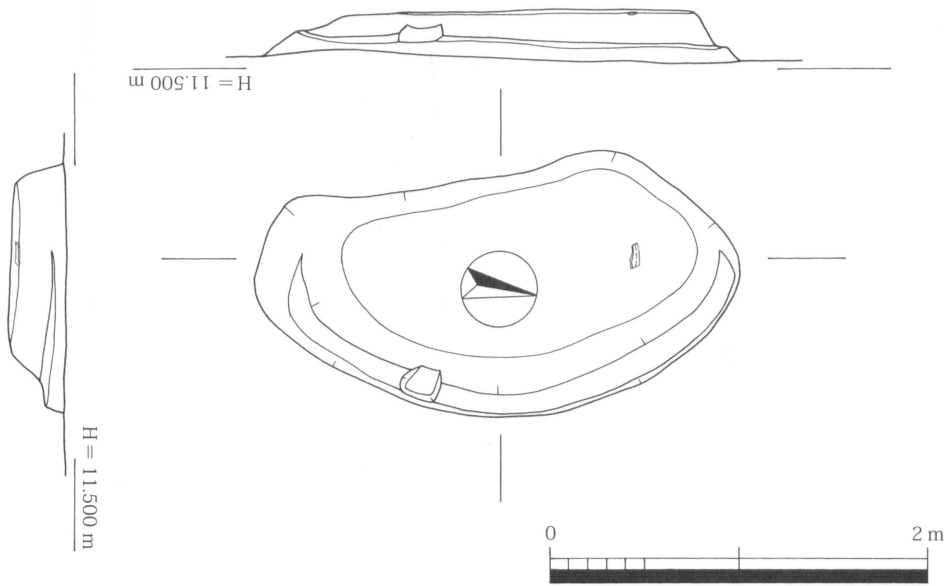


Fig.10 SK02 遺構図 (1/40)

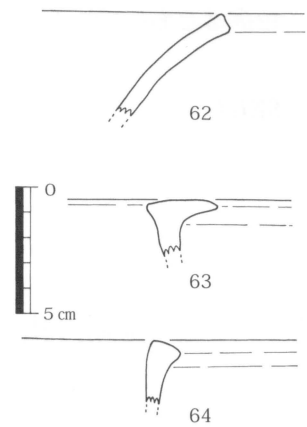


Fig.11 SK02 出土遺物 (1/3)

土坑

SK02 (Fig.10)

SD01 を切っており、長軸 2.6 m、短軸 1.3 m、深さ 0.24 m を測る楕円形を呈する土坑である。また、東側には深さ 0.1 m に三日月状に一段テラスが付く。また、そのテラスには切り合い関係不明のピットがあり、幅 0.25 m、深さは土坑検出面から 0.2 m を測る。

出土遺物 (Fig.11)

土器 (62 ~ 64)

すべて甕の口縁部片である。62 は外反しており、口縁端部を面取りし、面取った部分にヨコナデを施す。また、胎土には石英が多く含んでおり、色調は淡橙色を呈している。63 は鋤先口縁を呈している。内外面ともに磨耗のために調整が不明である。胎土には白色砂粒や角閃石などの砂粒が多く含み、色調は淡茶色を呈している。64 は断面三角形の口縁を呈している。内外面とも磨耗のために調整不明である。胎土には砂粒が少なく、色調は淡橙色を呈している。

SK03 (Fig.13)

SD01 の東側に位置しており、西側の調査区外に延びている。短軸約 0.9 m、検出面より深さ約 0.3 m で 0.15 m の深さで一段テラスを持つ。

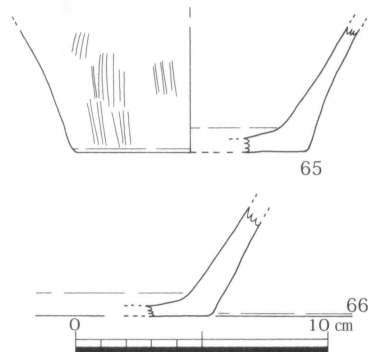


Fig.12 SK03 出土遺物 (1/3)

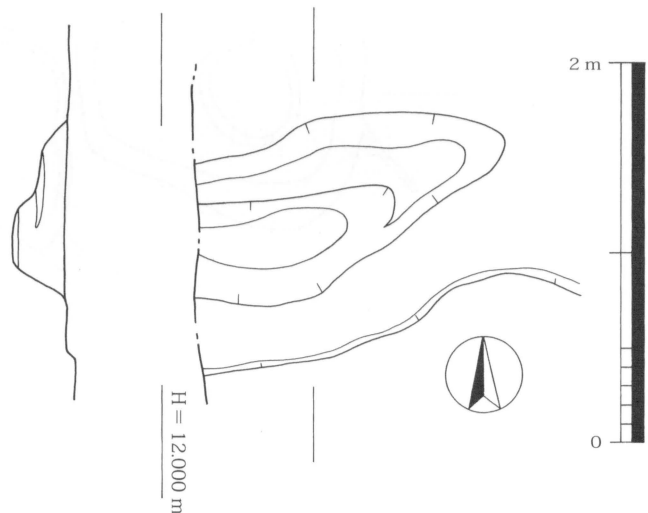
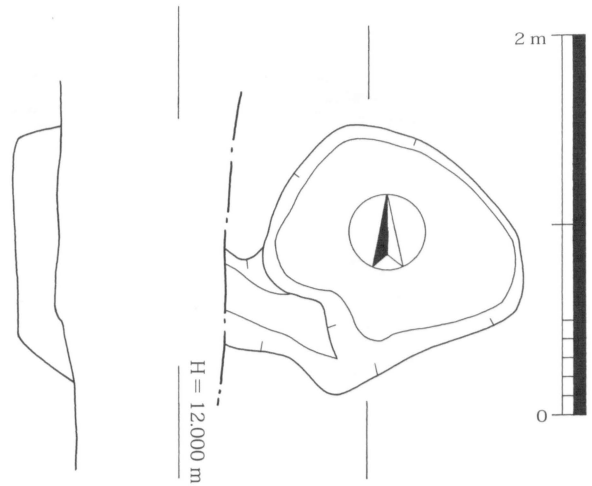


Fig.13 SK03 遺構図 (1/40)

出土遺物 (Fig.12)

土器 (65・66)

65・66は甕の底部片である。65の復元底径は9.1 cmで外面調整刷毛目である。66は内外面とも磨耗が激しく調整痕が消えている。色調はともに淡灰茶色を呈する。



SK04 (Fig.14)

SD01の東側に位置している、1.0 m × 1.3 mの隅丸方形に近い形を呈している。深さは検出面より約0.2 mである。また、西側にはSK04に切られる細い溝状遺構が西側調査区外に延びていく。

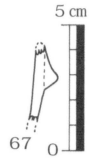


Fig.14 SK04 出土遺物 (1/3) 及び遺構図 (1/40)

出土遺物 (Fig.14)

土器 (67)

突帯を貼り付けて巡らしている甕の細片であると思われる。胎土には石英を多く含んでいる。また磨耗が激しく調整痕などは見られない。色調は淡灰茶色を呈する。

SK05・06 (Fig.15)

SK05はSD01の東側に位置している。また、SD01に切られており、1.2 m、深さは0.21 mを測り、円形を呈していたと思われる。遺物は細片のために図化出来ない。SD06はSK05の南側に位置しており、長軸約1.5 m、短軸約1.0 m、深さは約0.2 mを測る長方形を呈する土坑である。また、SK05掘り上後に幅0.5 mの円形ピットが検出された。深さはSK06底面から約0.1 mの浅いピットである。SK06に切られているものと思われる。SK06も遺物は細片が数点出土しただけであり図化するのに至らない。

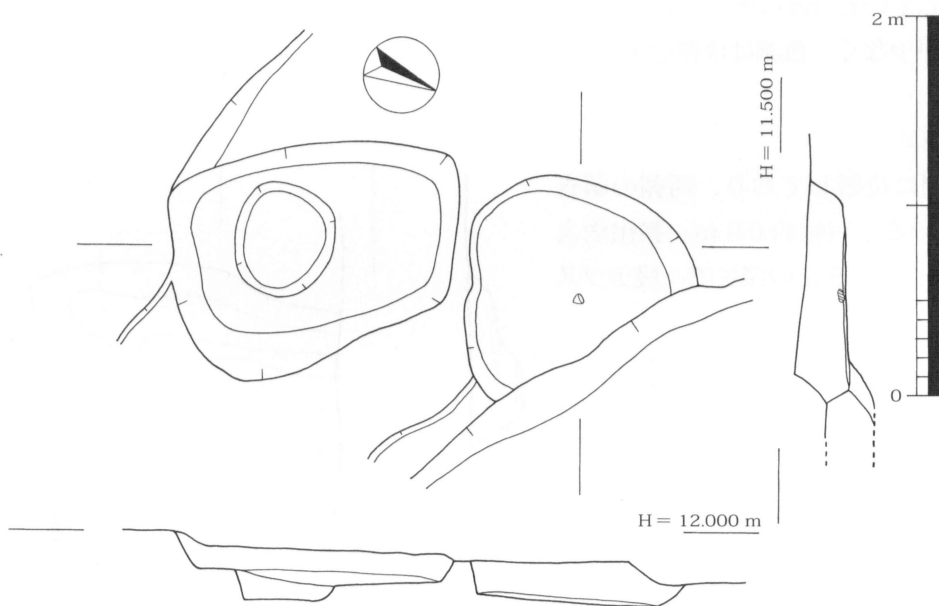


Fig.15 SK05・06 遺構図 (1/40)

SK07 (Fig.16)

SD01の北側に位置している。長軸1.4m、短軸0.9mの不定形を呈している。中央に幅0.6mほどの円形状に一段下がる。また、この円形に一段下がっている北側と南側では底面のレベルに若干の差が見られる。遺物は出土されなかった。

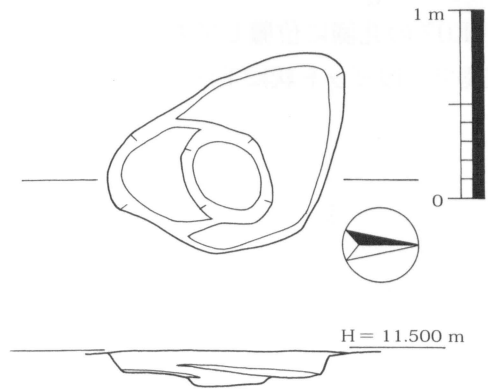


Fig.16 SK07 遺構図 (1/40)

SK08 (Fig.17)

SD01の南側で、調査区東西中央に位置しており、一部攪乱で切られている。短軸約1.5m、検出面からの深さ約0.2mである。

出土遺物 (Fig.18、Pla.16)

土器 (68～72)

68は甕の底部である。底径は7.0cmを測る。69・70はミニチュアの手捏ね土器と思われる。69は頸部から胴部にかけての細片と70は底部である。色調は暗灰茶色を呈しており、胎土は砂粒が多く入る。同一個体と思われる。

71・72は甕の口縁部である。71は口縁端部を面取りしている。72は小型の甕である。胎土には石英が多く入る。

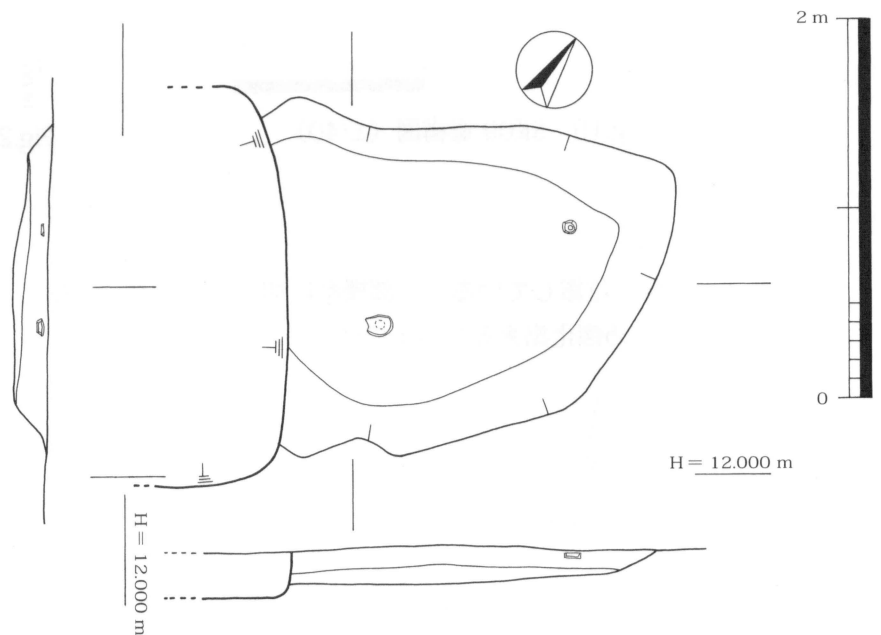


Fig.17 SK08 遺構図 (1/40)

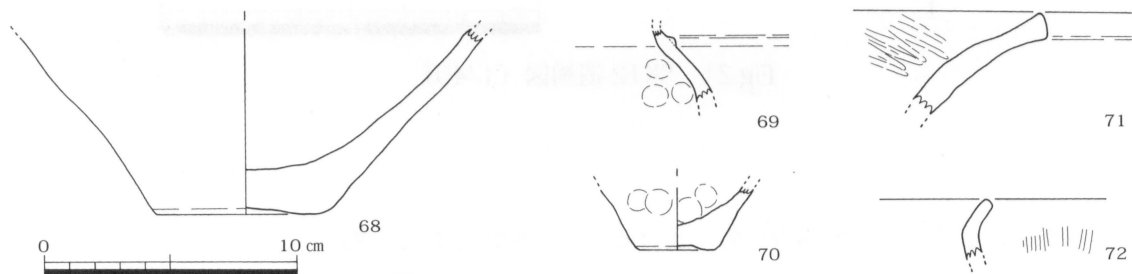


Fig.18 SK08 出土遺物 (1/3)

SK09 (Fig.19)

SD01の北側の風倒木中に位置している。長軸約1.5m、短軸約1.2m、深さ0.32mの楕円形を呈する。出土遺物は甕の細片が出土したが、図化出来るレベルのものはなかった。

SK11 (Fig.20)

SK07の北側に位置しており幅0.9mの円形を呈しており、深さは0.05mを測る浅い土坑である。東側で一段ピット状に下がる。遺物は土師器細片のみである。

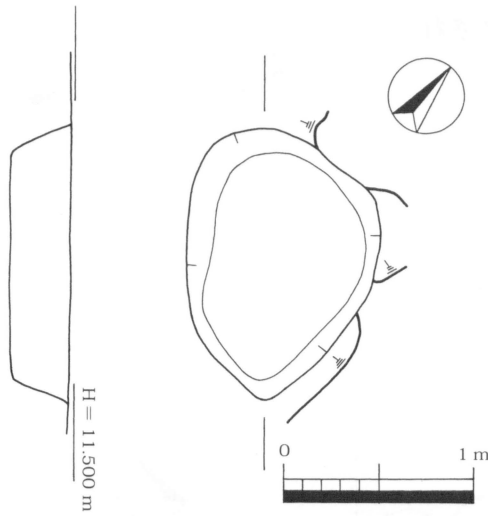


Fig.19 SK09 遺構図 (1/40)

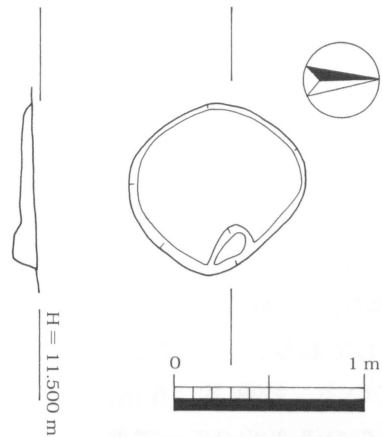


Fig.20 SK11 遺構図 (1/40)

SK12 (Fig.21)

SK08の西側に位置している。一部攪乱に切られており、短軸約1.1mを測り長方形を呈する。出土遺物は細片のため図化出来るレベルではなかった。

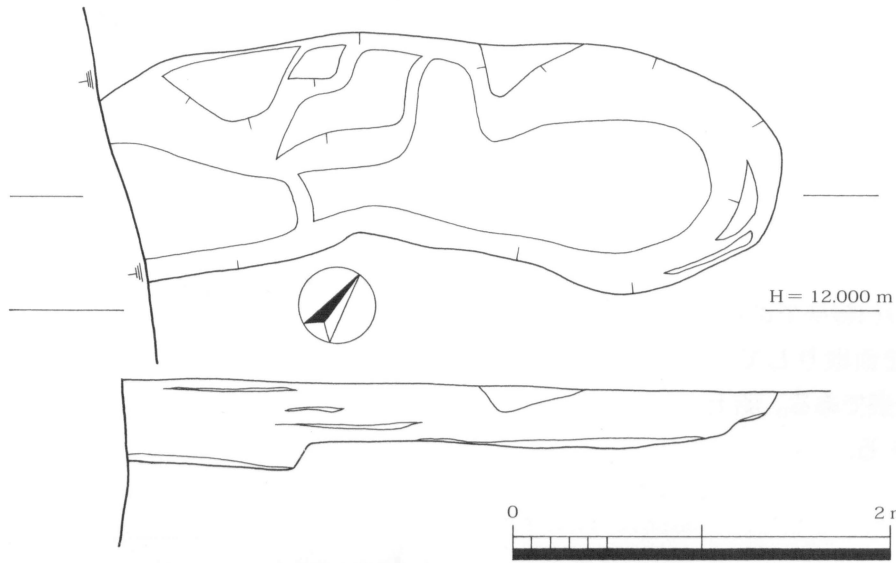


Fig.21 SK12 遺構図 (1/40)

SK13 (Fig.22)

SD01の南側に位置し、東側調査区外に延びるように検出された、幅約0.7m、深さ約0.1mの不定形を呈する。土器が半個体出土したが、上部は後世に掘削された際に一緒に削られたものと思う。

出土遺物 (Fig.23、Pla.16)

土器 (73)

甕の底部である。復元底径は8.8cmを測り、平底を呈す。色調は淡赤褐色で、外面調整は縦方向の刷毛目を施し、内面は磨耗のために調整不明である。

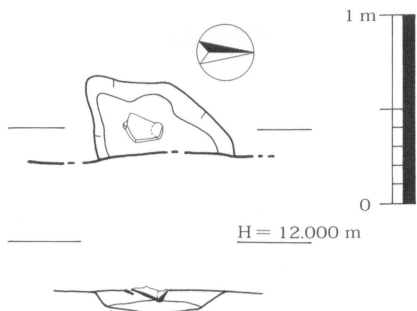


Fig.22 SK 13 遺構図 (1/40)

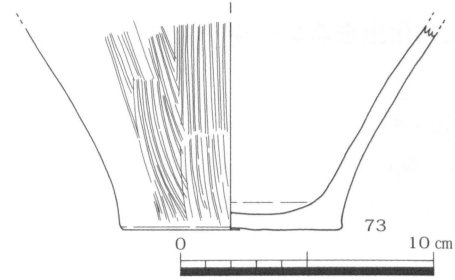


Fig.23 SK 13 出土遺物 (1/3)

SK14 (Fig.24)

SD10の南側に位置する。長軸 2.5 m、短軸 0.3 mを測る南北に長い方形を呈する。南側では深さ 0.3 mのピットをなす。

出土遺物 (Fig.25)

土器 (74)

鉢の口縁部と思われる。口縁内側をつまみ出すように突出させる。磨耗が激しく調整痕は看取されない。色調は淡黄茶色を呈する。

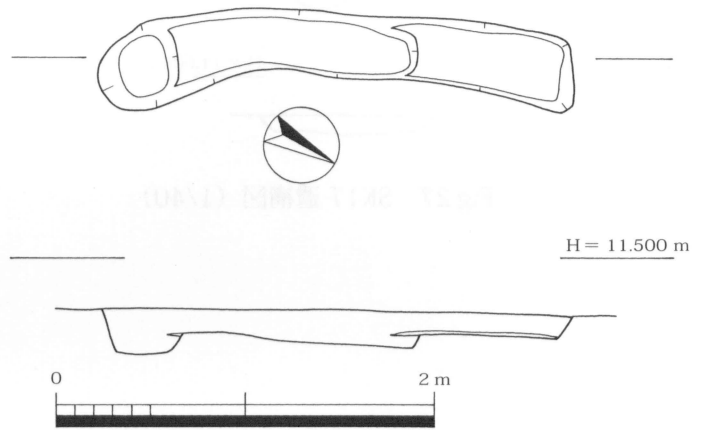


Fig.24 SK14 遺構図 (1/40)

SK16 (Fig.26)

調査区のほぼ中央に位置している、長軸 2.3 m、短軸 1.7 m、深さ 0.2 mを測り、楕円形を呈する土坑である。

出土遺物 (Fig.25)

瓦器碗 (75)

口縁部の細片である。内外面とも横方向のミガキが施されている。胎土は精製されており、色調は明灰色、口縁部は暗黒灰色を呈す。

青磁 (76)

鎚連弁文碗の細片である。釉調は青緑色を呈している。

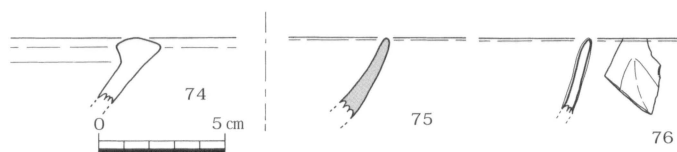


Fig.25 SK14・16 出土遺物 (1/3)

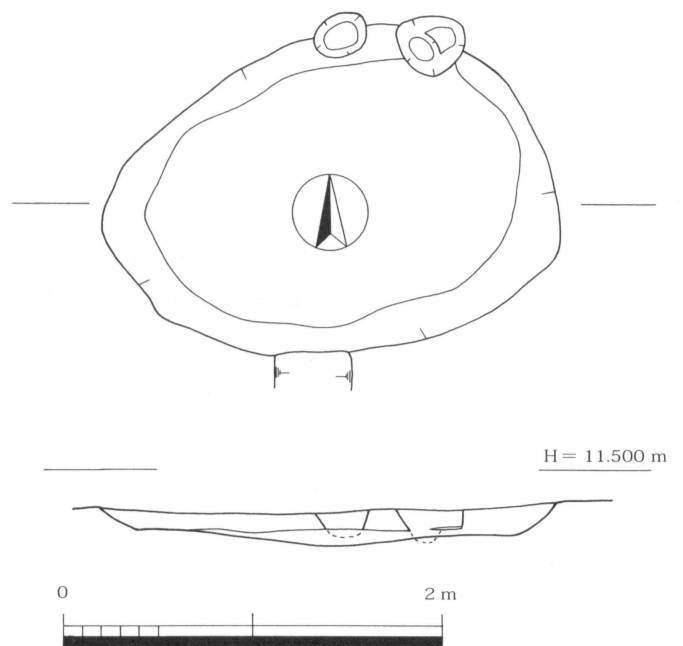


Fig.26 SK16 遺構図 (1/40)

SK17 (Fig.27)

SD10の北側に位置しており、幅1.0m、深さ0.1mを測る円形を呈する土坑である。出土遺物は細片のために図化出来るレベルではなかった。

SK18 (Fig.28)

SD20の北側に位置しており、長軸約1.8m、短軸約1.2m、深さ0.3mを測る楕円形を呈する土坑である。出土遺物は細片のために図化出来るレベルではなかった。

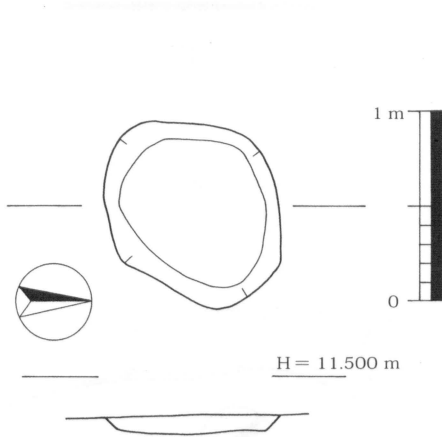


Fig.27 SK17 遺構図 (1/40)

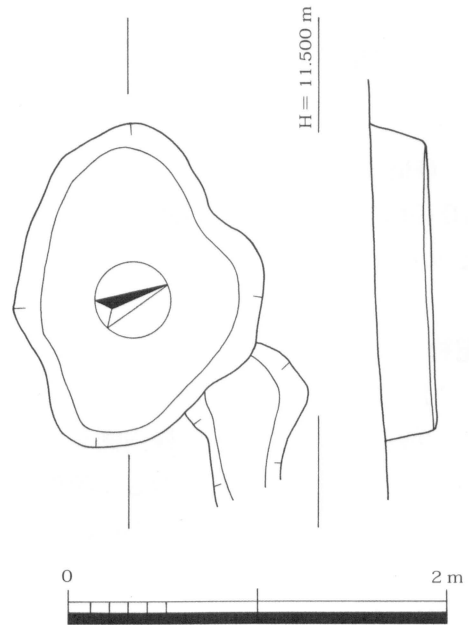


Fig.28 SK18 遺構図 (1/40)

包含層出土遺物 (Fig.29、Pla.17)

重機による表土除去の際に検出面より一段上で止め、遺構検出までを人力で掘下げた。検出面直上に薄く堆積してある黒褐色土層 (Fig. 3 土層図・2層) より遺物が出土した。これら遺物はSD01・10・20の遺物が混在しているために掘削等によるものと思われる。

土器 (77・78)

77は甕の口縁部である。鋤先状を呈しており、器面の剥落が著しい。78は甕の底部である。磨耗が激しく調整痕は看取されない。また、胎土には石英を多く含んでいる。

須恵器 (79・80)

79は壺の肩部と思われる。外面にはカキ目を施し、内面はヨコナデを行う。80は79と同一個体であると思われる肩部から胴部にかけての片である。色調は暗灰色を呈している。

陶磁器 (81～83)

81は丸彫りの連弁文の碗で、釉調は暗オリーブ色である。82は灰色を呈する碗である。83は白磁の皿である。口縁部は端反りとなる。

石製品 (84)

凹石である。楕円形の石の中央両面を凹ませる。一部分は欠損しており、凹み部分にもクラックが入る。石材は安山岩である。

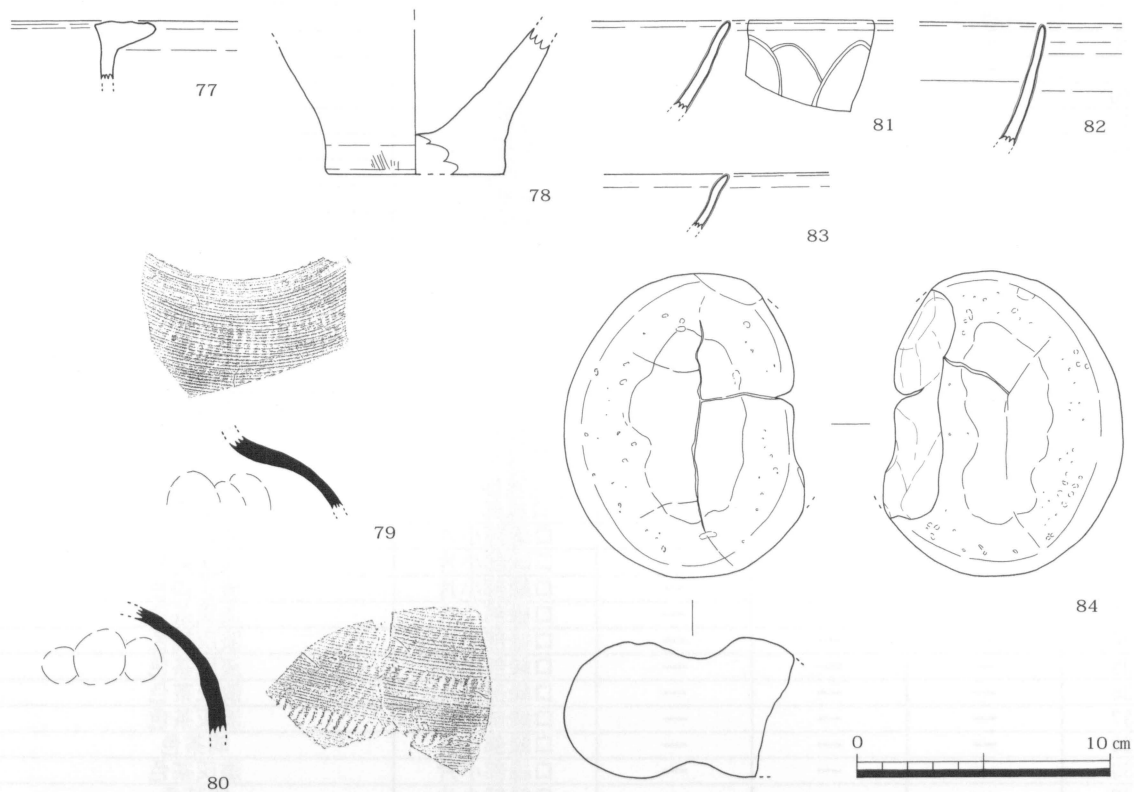


Fig.29 包含層出土遺物 (1/3)

小結

今回の調査では、3条の溝状遺構を検出した。それぞれを整理すると、SD01は弥生後期の遺物を主体としており、また、南側の丘陵裾部分に地形に沿って検出している。そして、ほとんどの遺物でローリングを受けているために流路として機能していたものと思われる。調査区周辺の弥生時代の遺跡は蔵数森ノ木遺跡 (Fig.1-4) や田佛遺跡 (Fig.1-5) などの集落遺跡が蔵数東野屋敷遺跡 (Fig.1-3) では中期前半の甕棺墓を主体とする墓地遺跡が知られる。東野屋敷遺跡は調査面積が狭いため墓地の時期幅や墓域などは不明であるが、蔵数森ノ木遺跡の集落が弥生時代中期末から古墳時代後期まで集落は継続するために墓地の形成も中期前半から、ある程度下るものと思われる。墓域に関しては広範囲に予想されている。SD01は前述した通り流路として使用されたと思われるが、その使用目的などは不明である。だが、溝出土の弥生後期の土器が多く出土しているために、丘陵上には蔵数森ノ木遺跡を中心とする大規模集落と、それ以外の小規模集落が点在していたものと推測する。

SD10は本文の通り自然に形成された流路と思われる。遺物の主体は古墳時代である。注目される遺物としては透かしの入る高杯の脚部がある。この高杯は欠塚古墳 (Fig.1-12) より出土した高杯と同タイプであり、欠塚古墳は5世紀後半代に比定される。

SD20は、現在の農業用水路の付け替え前の水路である。17世紀に入ると筑後市内は水利目的の整備を始める。蔵数地区、西牟田地区の八女丘陵西端部には西側に広がる低地水田地帯に水を供給出来るように多くの溜池を作るようになる。SD20もその多く作られた溜池の一つに向かっており、溜池の掘削と伴に掘られて、数回の変遷を経て現在の位置になったものと思われる。

以上のように3条とも立地が谷部ということもあり水に関連した性質のものであり、時期や溝の性質そのものは3条とも違うが谷部での状況や自然形成をよく表しているものと思う。

Fig	NO	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	色調
5	1	(31.6)	—	—	口縁部 1/4	明橙茶色
5	2	—	—	—	口縁部小片	淡灰褐色
5	3	—	—	—	口縁部小片	淡茶灰色
5	4	(25.0)	—	—	口縁部 1/4	淡黒灰色
5	5	—	—	—	口縁部小片	淡茶褐色
5	6	—	—	—	口縁部小片	淡灰褐色
5	7	(25.0)	—	—	口縁部小片	淡黒灰色
5	8	—	—	—	小片	淡茶褐色
5	9	—	7.6	—	底部 1/2	淡黒灰色
5	10	—	(11.0)	—	底部 1/3	淡黒灰色
5	11	—	(6.0)	—	底部 1/2	淡茶色
5	12	—	(7.3)	—	底部 1/3	淡橙茶色
5	13	—	4.95	—	底部のみ	淡灰茶色
5	14	—	(7.3)	—	底部 1/4	淡灰褐色
5	15	—	6.5	—	底部のみ	淡灰褐色
5	16	—	5.9	—	底部のみ	淡灰茶色
5	17	—	7.8	—	底部のみ	淡灰褐色
5	18	—	(6.0)	—	底部 1/2	明橙茶色
6	19	5.0	6.2	15.0	完形	淡茶褐色
6	20	(6.8)	(7.4)	14.5	1/2	淡橙茶色
6	21	3.3	5.15	10.2	完形	淡橙茶色
7	25	(17.0)	—	—	口縁部 1/4	淡灰褐色
7	26	(17.4)	—	—	口縁部 1/3	淡灰茶色
7	27	(15.8)	—	—	口縁部 1/3	淡灰茶色
7	28	(15.2)	—	—	口縁部 1/4	淡茶色
7	29	(13.7)	—	—	口縁部 1/4	淡灰褐色
7	30	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
7	31	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
7	32	—	—	—	口縁部小片	淡灰褐色
7	33	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
7	34	—	—	—	口縁部小片	淡灰褐色
7	35	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
7	36	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
7	37	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
7	38	—	—	—	口縁部小片	明茶色
7	39	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
7	40	—	—	—	口縁部小片	明茶色
7	41	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
7	42	—	—	—	口縁部小片	明茶色
7	43	—	—	—	口縁部小片	淡橙茶色
7	44	—	—	—	口縁部小片	淡橙茶色
7	45	—	—	—	口縁部小片	淡灰褐色
7	46	—	4.6	—	底部のみ	淡茶褐色
7	47	5.6	—	4.55	完形	淡茶灰色
7	48	(10.4)	—	5.2	1/3	明橙茶色
7	49	(15.7)	—	—	1/4	明橙茶色
8	50	—	—	—	体部小片	暗灰色
8	51	—	—	—	体部小片	暗灰褐色
8	52	—	—	—	体部小片	暗灰褐色
8	53	—	(10.5)	—	脚部 1/2	明灰色
9	55	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
9	56	—	—	—	口縁部小片	灰白色
9	57	—	—	—	体部小片	釉調=淡黄緑色・胎土=暗灰色
9	58	—	—	—	体部小片	明灰色
9	59	—	(5.9)	—	1/4	釉調=灰白色・胎土=赤褐色
9	60	—	—	—	口縁部小片	釉調=暗茶褐色
9	61	—	—	—	底部小片	明赤褐色
11	62	—	—	—	口縁部小片	淡橙茶色
11	63	—	—	—	口縁部小片	淡灰茶色
11	64	—	—	—	口縁部小片	淡赤茶色
12	65	—	(9.4)	—	底部 1/4	淡灰茶色
12	66	—	—	—	底部～体部小片	淡灰茶色
14	67	—	—	—	体部小片	淡灰茶色
18	68	—	7.0	—	底部のみ	淡橙茶色
18	69	—	—	—	体部小片	淡灰茶色
18	70	—	3.0	—	底部のみ	淡橙茶色
18	71	—	—	—	口縁部小片	明橙茶色
18	72	—	—	—	口縁部小片	淡茶褐色
23	73	—	(8.8)	—	底部 1/4	淡茶褐色
25	74	—	—	—	口縁部小片	淡黄茶色
25	75	—	—	—	口縁部小片	淡黒灰色
25	76	—	—	—	口縁部小片	釉調=青緑色・胎土=白灰色
29	77	—	—	—	口縁部小片	淡茶褐色
29	78	—	(6.9)	—	底部 1/2	淡灰茶色
29	79	—	—	—	体部小片	暗灰色
29	80	—	—	—	体部小片	暗灰色
29	81	—	—	—	口縁部小片	釉調=暗オリーブ色・胎土=茶灰色
29	82	—	—	—	口縁部小片	釉調=淡灰色・胎土=淡灰茶色
29	83	—	—	—	口縁部小片	釉調=白灰色・胎土=灰白色

※ () 内は復元による数値

Tab.1 歳数保古手遺跡出土土器観察表

2. 西牟田銭亀遺跡

(1) はじめに

当遺跡は、筑後市大字西牟田銭亀に所在しており、調査区はJR鹿兒島本線西牟田駅東側に隣接し、南北約24 m、東西約12 mの面積約300 m²弱である。標高は22.6 m～21.5 mであり、北西側に向かって下っている丘陵斜面に位置している。平成17年4月12日より表土除去を(有)福島重機に委託し開始した。調査は阿比留が担当し、平成17年4月28日に終了した。



Fig.30 調査地点位置図 (1/2500)

(2) 検出遺構

ピット

SP01 (Fig.31)

調査区南側で検出された幅0.3 m、深さ0.2 mを測る。幅3 cm程の方形木杭が出土した。

溝

SD02 (Fig.32、Pla.12・13)

調査区北西で検出されたL字状を呈する溝である。東西方向に1.7 m、南北方向に6.4 mの長さで検出したが、南側は調査区外に延びる。深さは0.1 m～0.2 mを測る。この溝は現状ではL字状を呈しているが、南側調査区外に延びる箇所では西側に屈曲する様相が見られるのでコ字状もしくは方形になる可能性もある。溝の深さが浅いため埋土は黒褐色の単層であった。

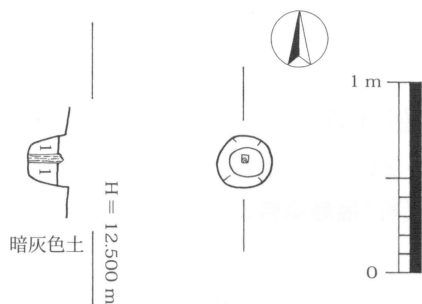


Fig.31 SP01 遺構図 (1/40)

SD02 (Fig.34、Pla.17・18)

出土遺物

土師器 (1～11)

1・2は甕である。1は口径15.0 cm、器高19.4 cmを測り、丸底を呈する。口縁は直線的に立ち上がり、内面は横方向のハケ目を施す。また、外面の器面調整は縦方向のハケ目、内面は体部下半は縦方向、上部は横方向のケズリを施す。色調は淡茶色を呈する。2は復元口径26.7 cmを測る大型の甕である。口縁部は外反しており、外面の器面調整は磨耗して不明で、内面は横方向のケズリを施す。色調は淡茶色を呈する。3は鉢である。外面を斜め方向に交差するようにハケ目調整を施し、内面は縦方向のケズリを行う。色調は淡橙色を呈す。4は手捏ねのミニチュア土器で、色調は淡橙茶色を呈し、口径3.6 cm、器高2.95 cmを測り、丸底を呈する。5～11までは杯である。6は口縁部が内湾気味に立ち上がり、器高は高く、底部は丸底を呈している。7～9は口縁部が直立しており、体部下半はヘラ削り、口縁部は横ナデを施す。10・11は口縁部が外反し、また、薄く尖らしている。このように杯には内湾、直立、外反3タイプの出土があり、直立口縁でも7・8と9のように法量の違いが見られる (Fig.34)。

遺物の時期としては、甕の胴部が球胴に近く、外面調整が縦方向主体の調整などから5世紀後半だと思われる。

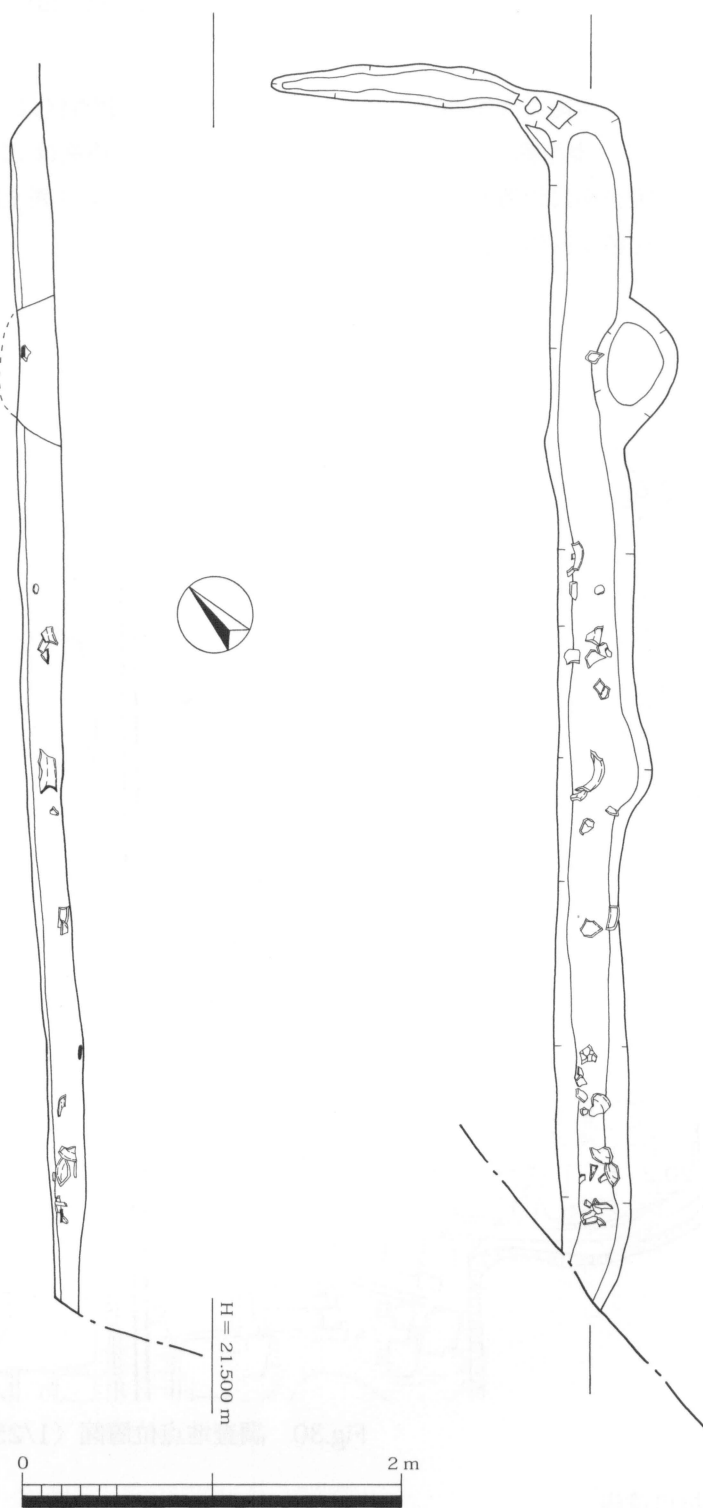


Fig.32 SD02 遺構図 (1/40)



Fig.33 西牟田銭亀遺跡 遺構全体図 調査区南壁 土層図 (1/80)

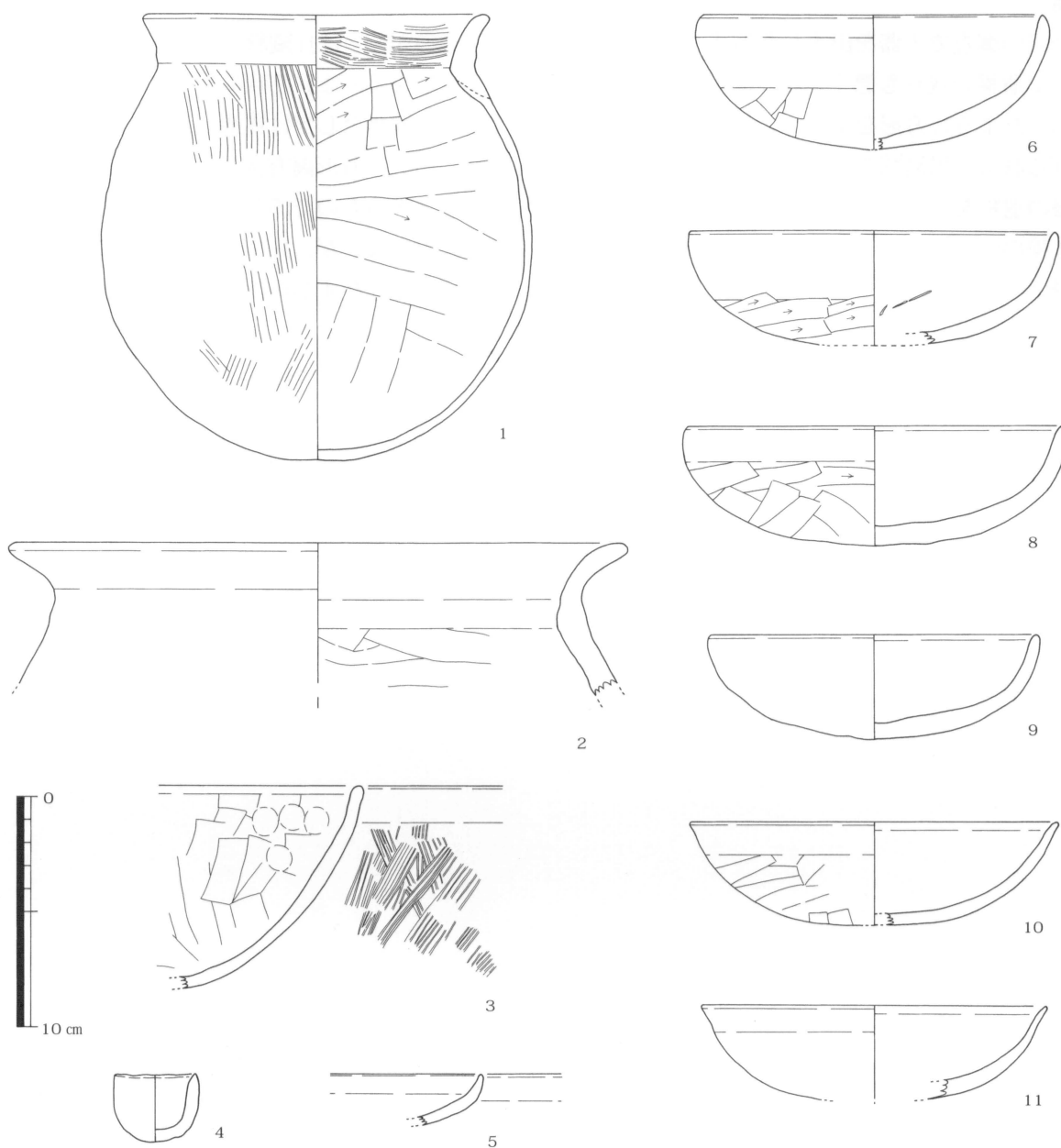


Fig.34 SD02 出土遺物 (1/3)

NO	口径 (cm)	器高 (cm)	残存	色調
1	(15.0)	19.4	2/3	淡灰茶色
2	(26.7)	—	口縁部 1/2	淡灰茶色
3	—	—	1/5	淡橙色
4	3.6	2.95	完形	淡橙茶色
5	—	—	1/5	淡橙茶色
6	(15.0)	(5.9)	1/2	淡橙色
7	(16.1)	(4.9)	1/3	淡橙色
8	16.5	5.15	2/3	淡橙茶色
9	(14.4)	(4.5)	2/3	淡灰茶色
10	(16.0)	(4.5)	1/4	淡橙茶色
11	(15.0)	(4.1)	1/4	淡橙茶色

※ () 内は復元による数値

Tab.2 西牟田銭亀遺跡出土遺物観察表

小結

今回の調査で土器を出土した遺構はSD02のみであり、そのSD02は丘陵斜面にL字状に検出されたもので遺構の残りも悪くかなり削平されたものである。また、SD02はL字状に検出されたものの本文で示したように方形を呈していたものと思われる。考えられる遺構としては周溝状遺構、方形周溝墓が挙げられる。周溝状遺構は筑後市内での検出例は多くあり、円形、方形両方存在し、また周溝からも一定量の遺物を出土している。しかし、時期は弥生後期を中心とするものである。方形周溝墓は筑後市内では検出例はなく、また主体部が検出されていない限りは断言出来ないが、先で述べたように削平をかなり受けているために主体部の痕跡が残っていないか、調査区外に存在する可能性もあるために、可能性のレベルでは方形周溝墓が高いと思われる。

PLATE

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



8-2

Fig 番号

遺物番号

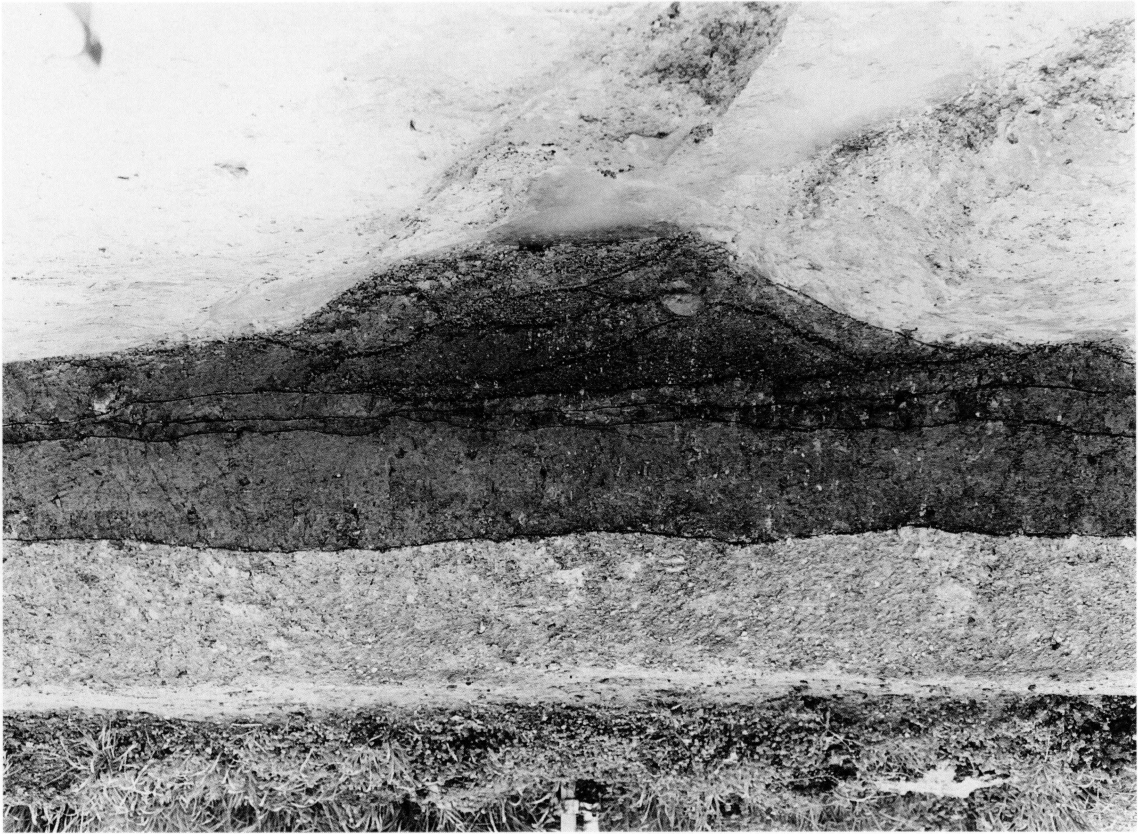


蔵数保古手遺跡 SD01 (東から)

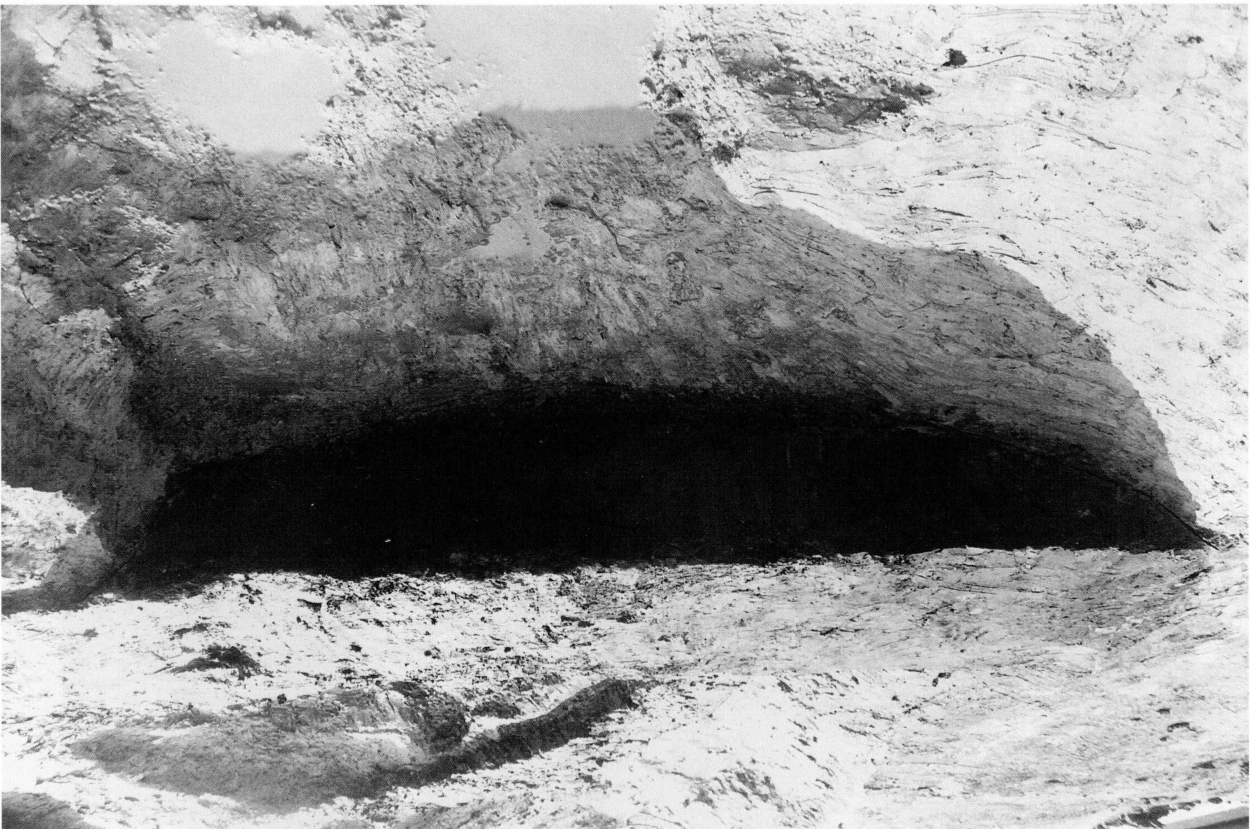


蔵数保古手遺跡 SD01 東側ベルト土層 (西から)

藏教保古手遺跡 SD01 調査区西壁土層



藏教保古手遺跡 SD01 西側ベルト土層 (西から)





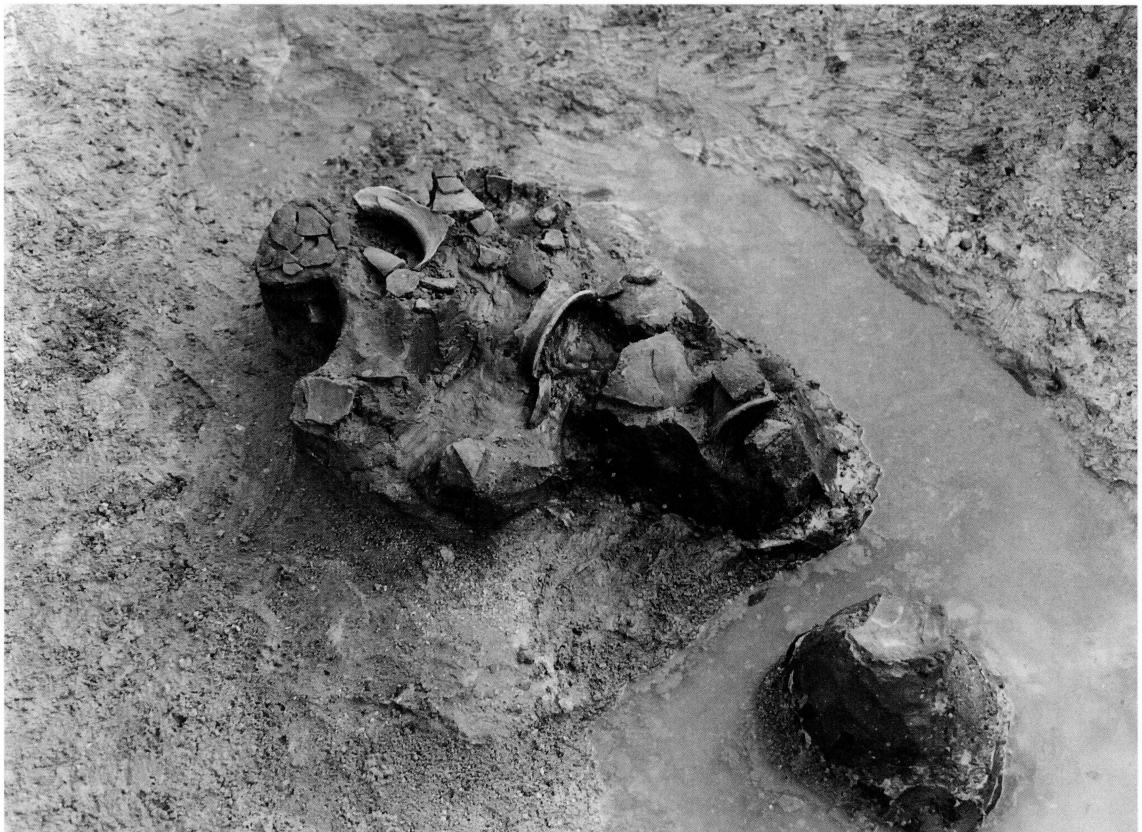
蔵数保古手遺跡 SD10・15（東から）



蔵数保古手遺跡 SD10 遺物出土状況（西から）



藏数保古手遺跡 SD10 遺物出土状況 (西から)



藏数保古手遺跡 SD10 出土遺物近景 (西から)



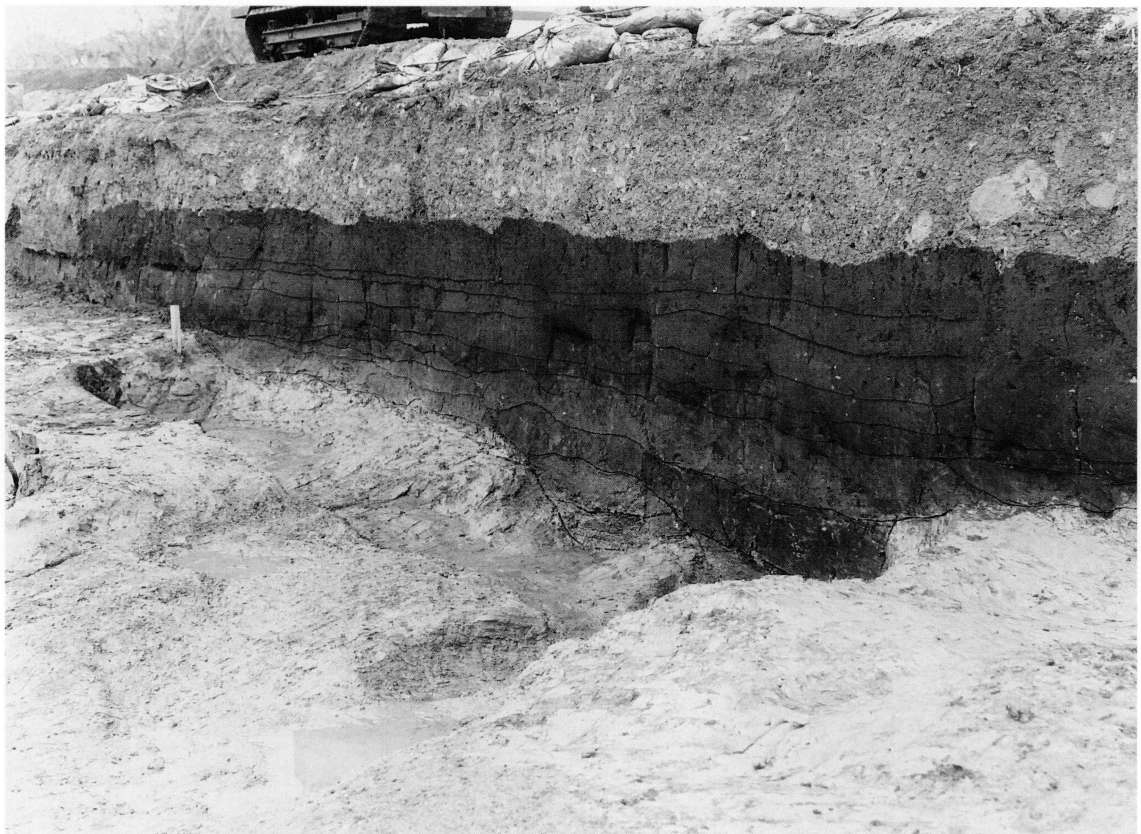
蔵数保古手遺跡 SD10 出土遺物近景（西から）



蔵数保古手遺跡 SD10 出土遺物近景（西から）



蔵数保古手遺跡 SD10 ベルト土層（西から）



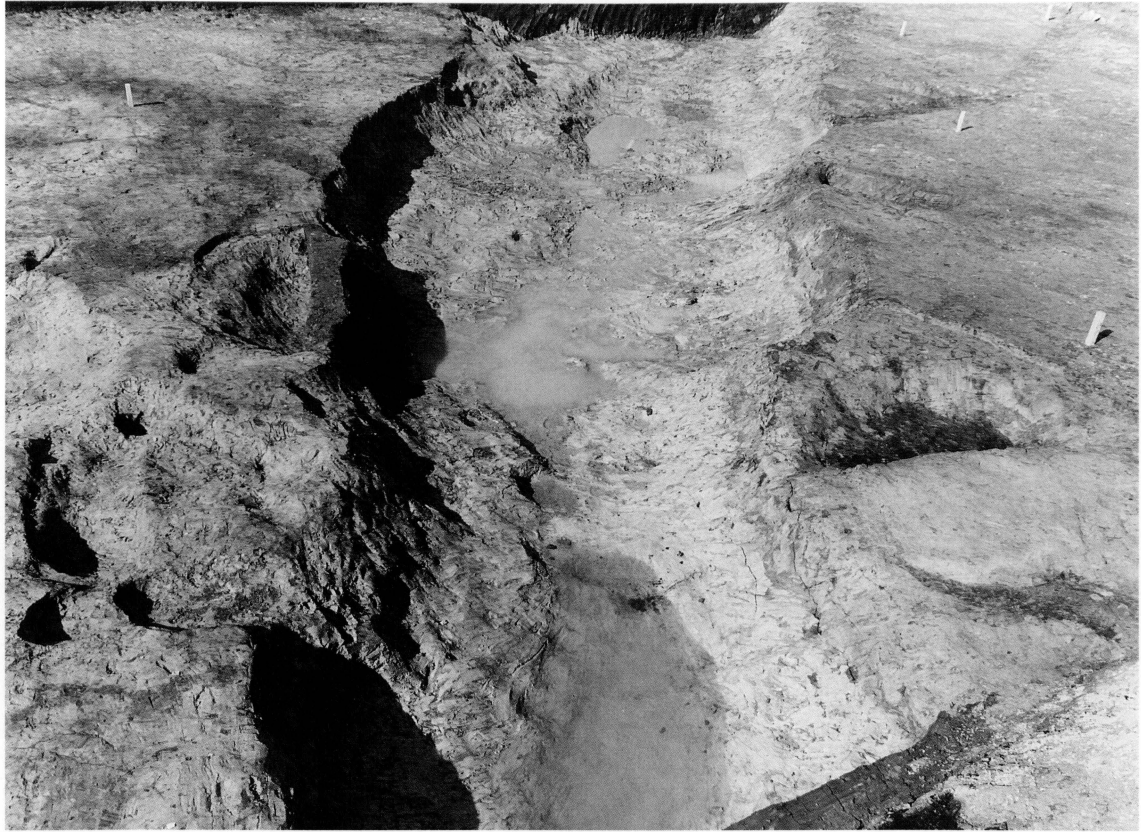
蔵数保古手遺跡 SD10 調査区東壁土層



蔵数保古手遺跡 SD10・15 調査区西壁土層



蔵数保古手遺跡 SD15 調査区東壁土層



藏数保古手遺跡 SD20 (東から)



藏数保古手遺跡 SD20 調査区西壁土層



蔵数保古手遺跡全景（北を望む）



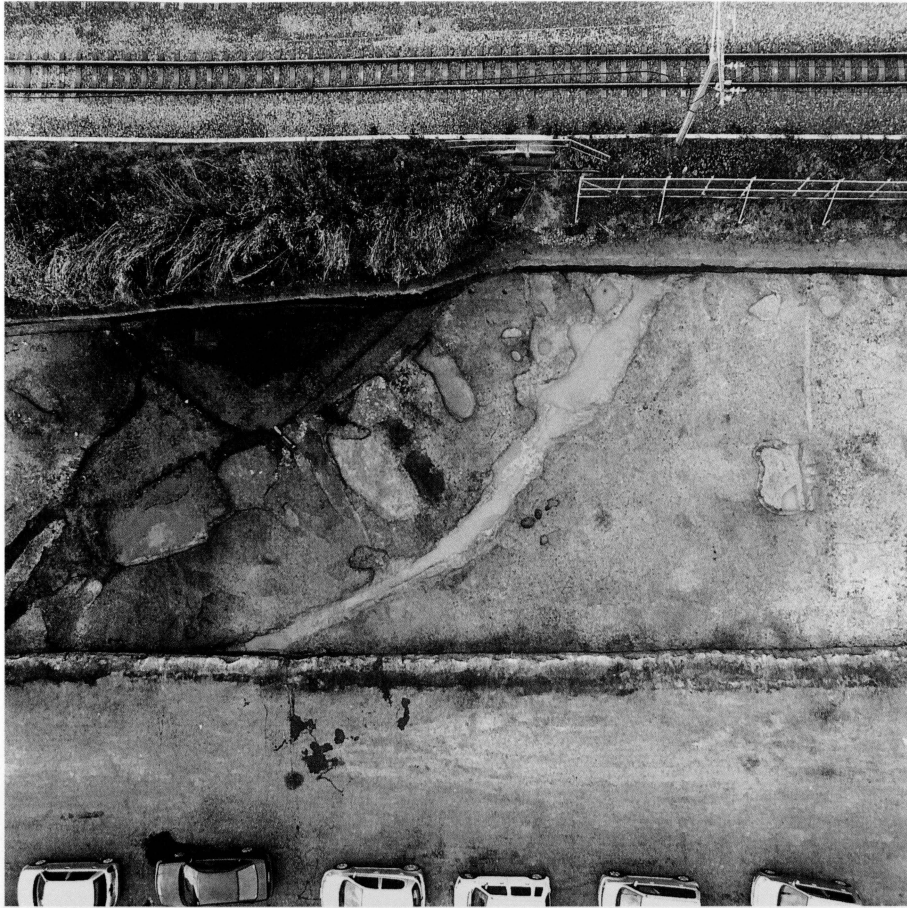
蔵数保古手遺跡全景（真上）



蔵数保古手遺跡調査区北側（真上）



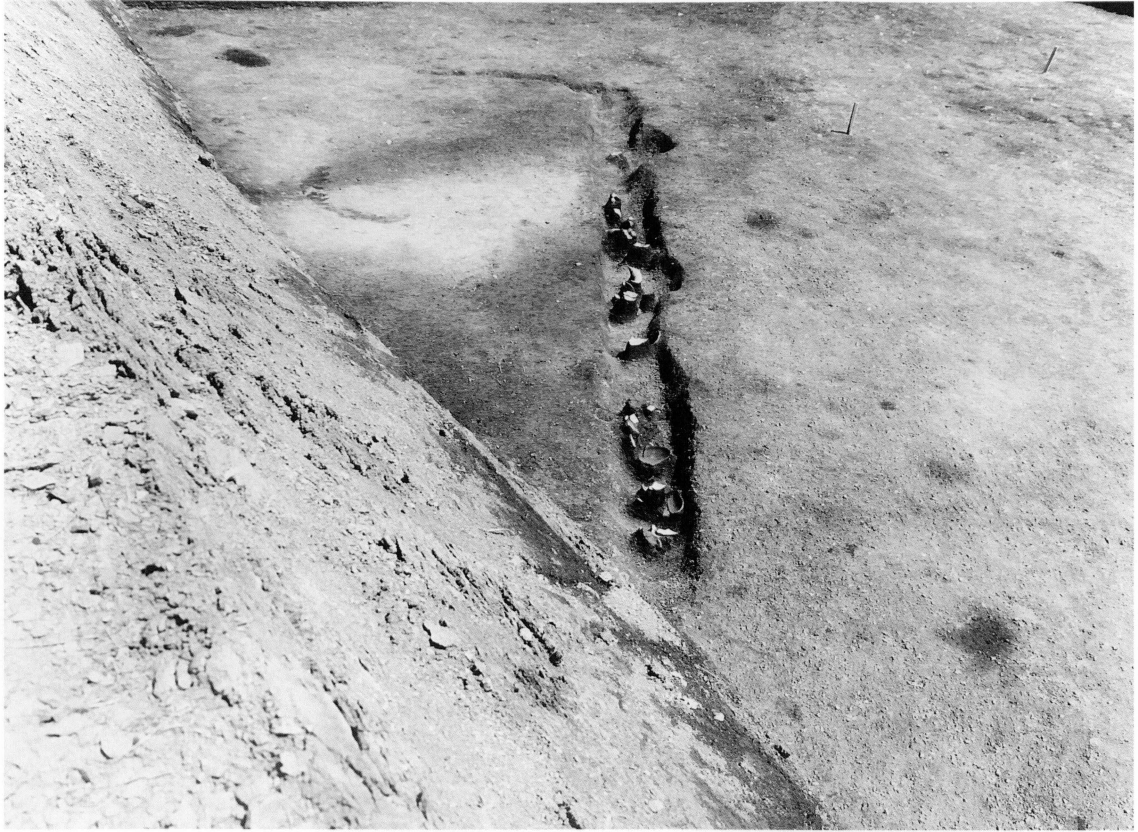
蔵数保古手遺跡調査区南側（真上）



蔵数保古手遺跡 SD01 空撮 (真上)



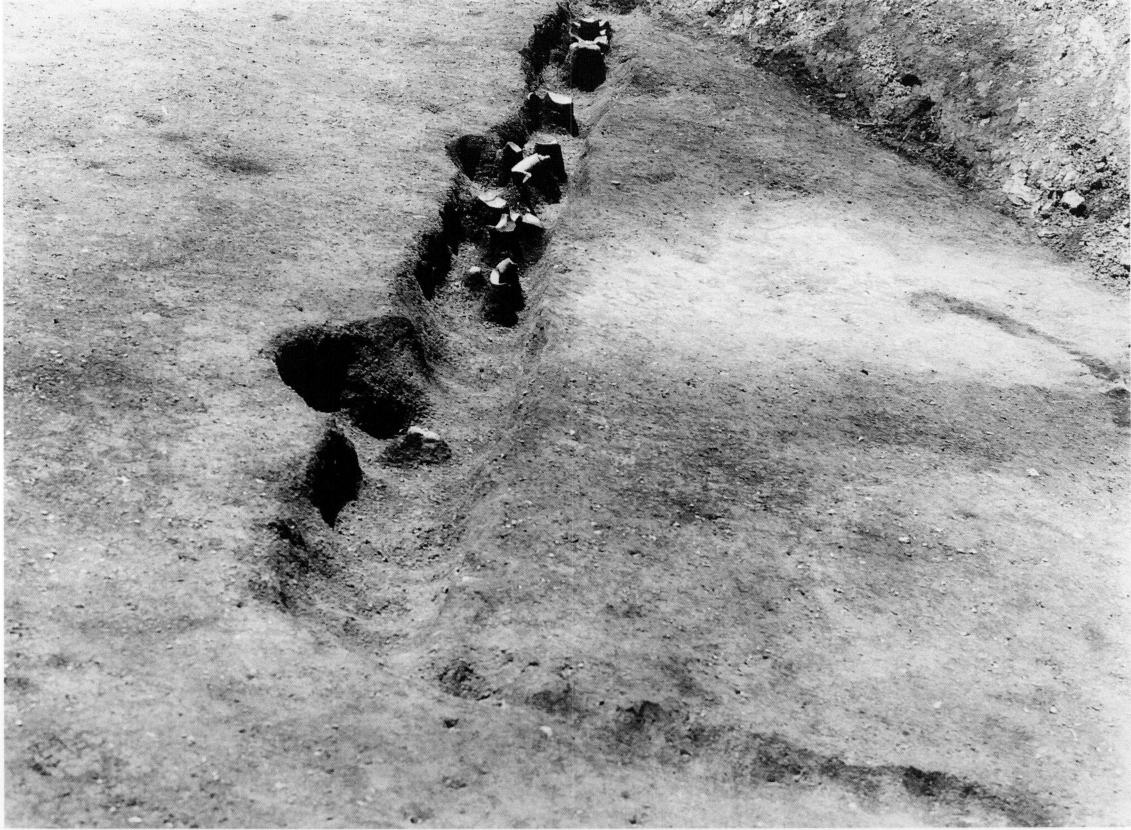
蔵数保古手遺跡 SD10・15 空撮 (真上)



西牟田銭亀遺跡 SD02 遺物出土状況 (南西から)



西牟田銭亀遺跡 SD02 遺物出土状況 (南西から)

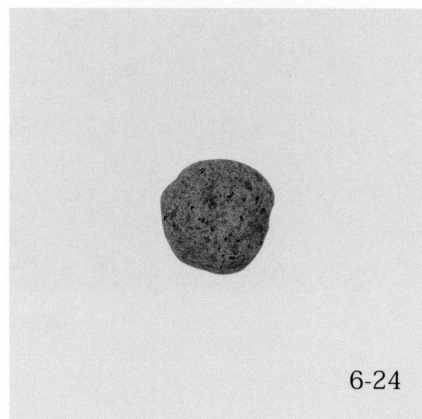
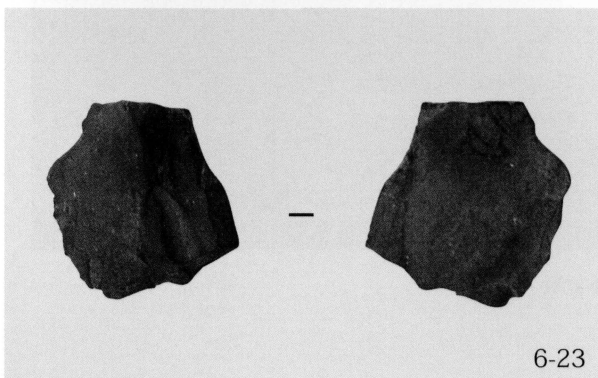
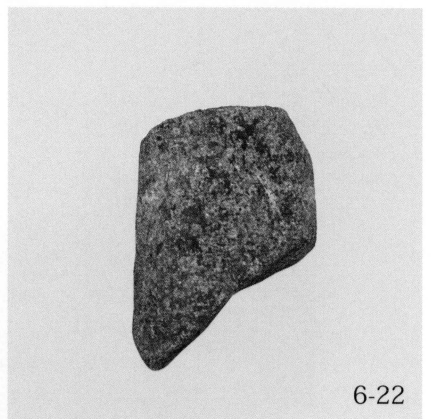
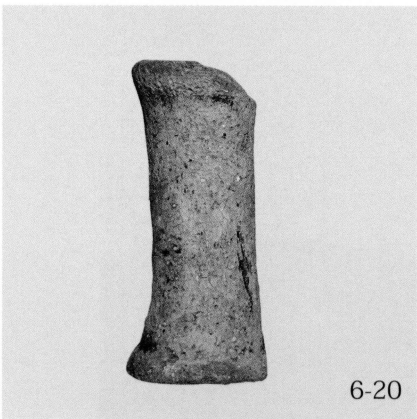
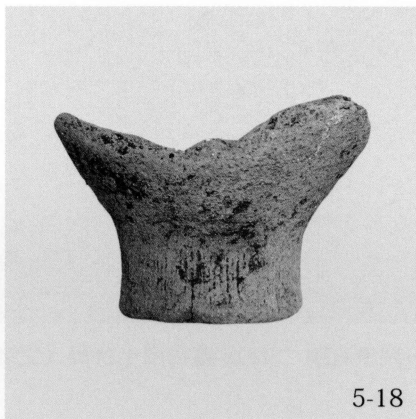
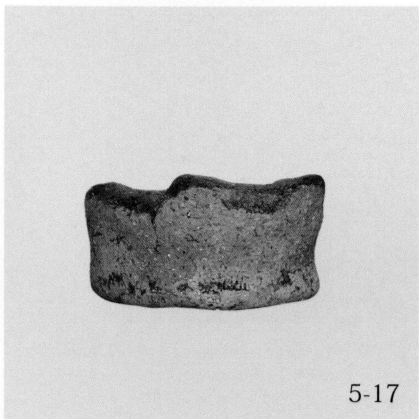
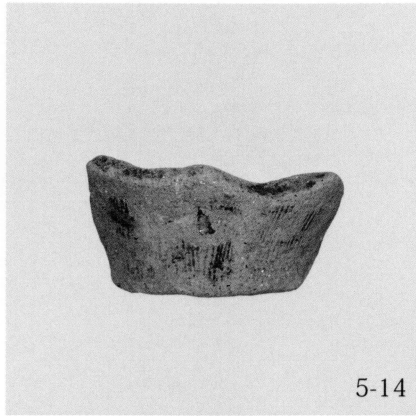
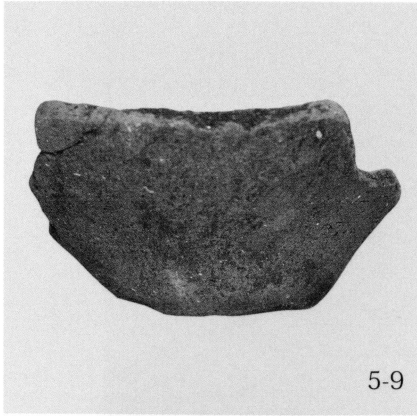


西牟田銭亀遺跡 SD02 遺物出土状況（北東から）

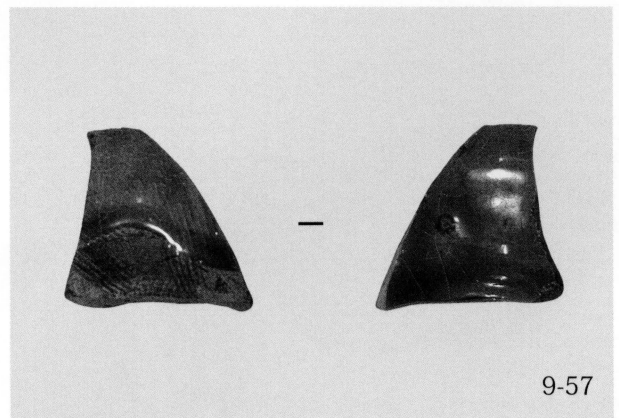
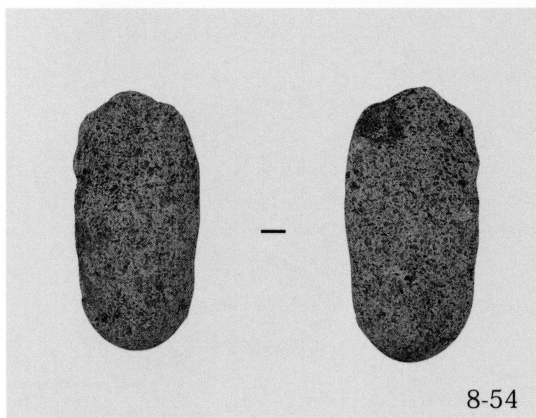
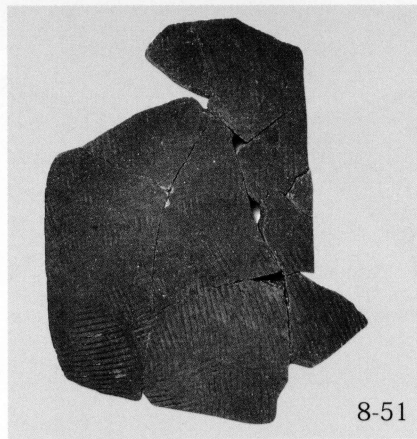
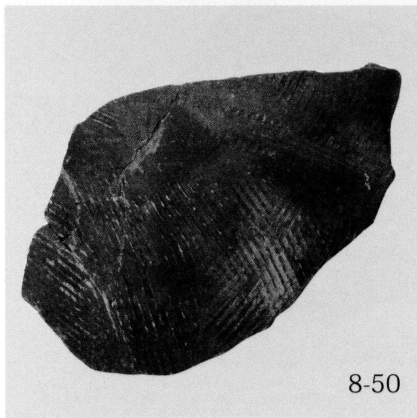
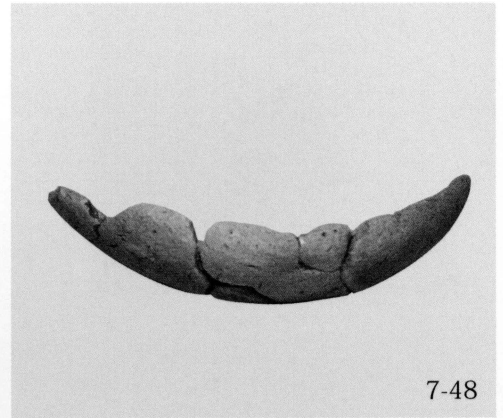
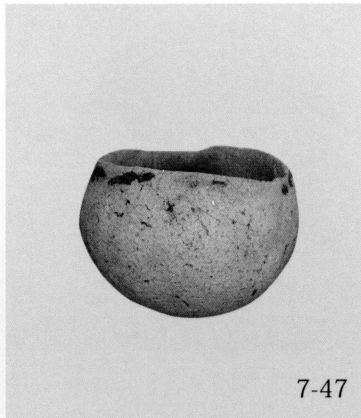
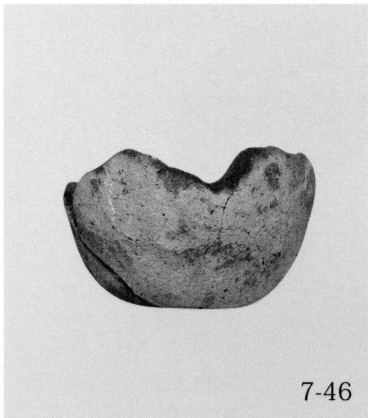
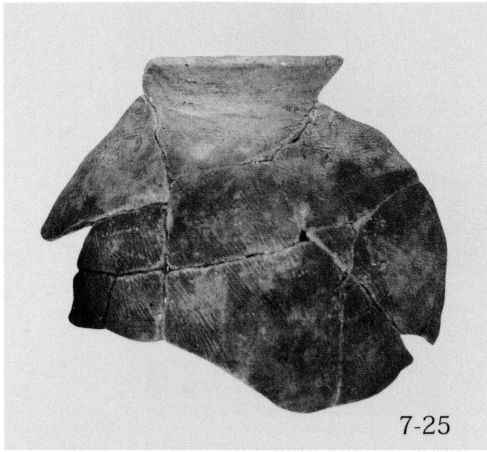


西牟田銭亀遺跡全景（北から）

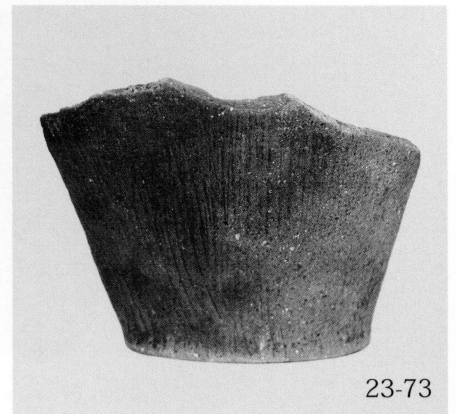
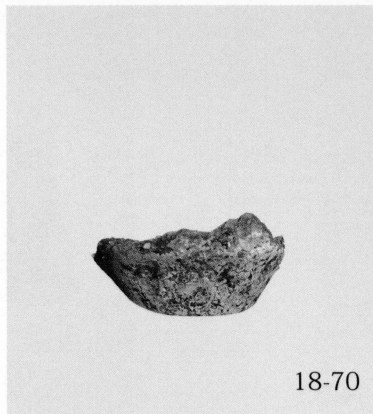
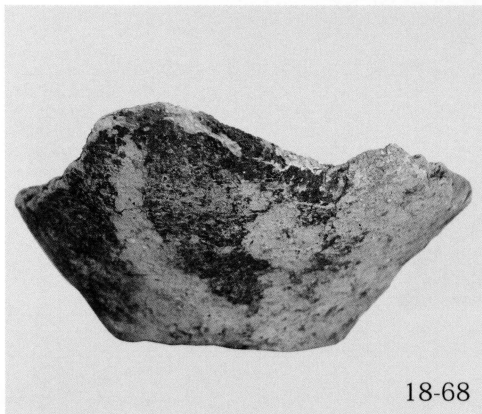
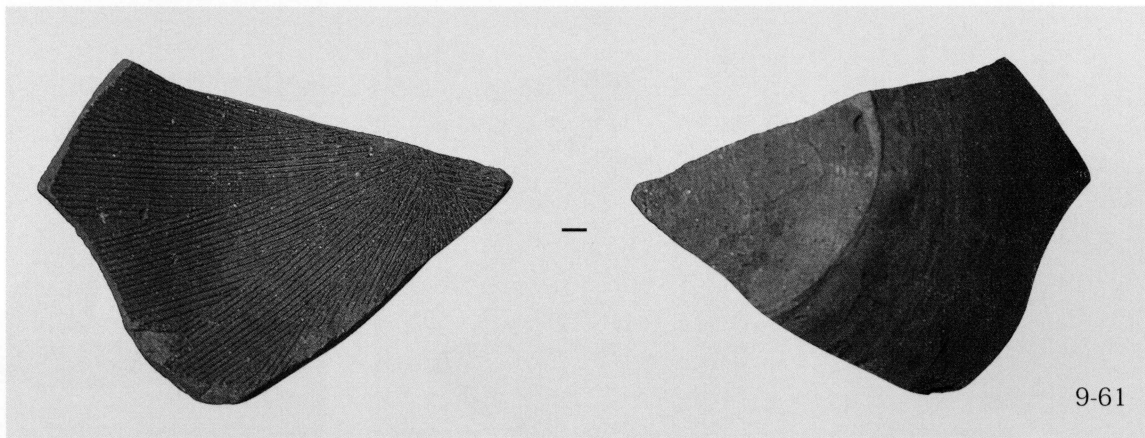
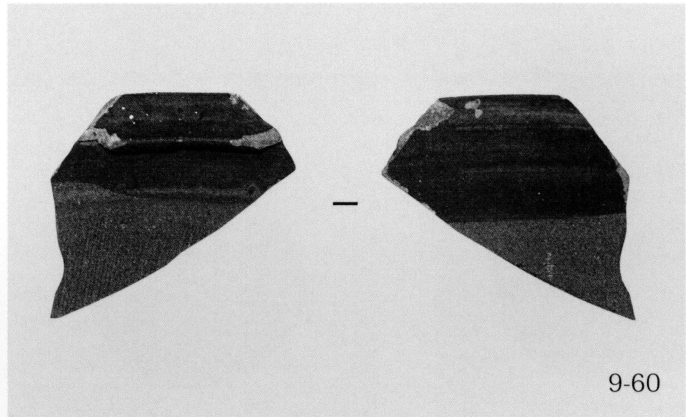
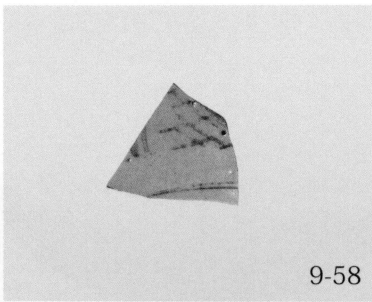
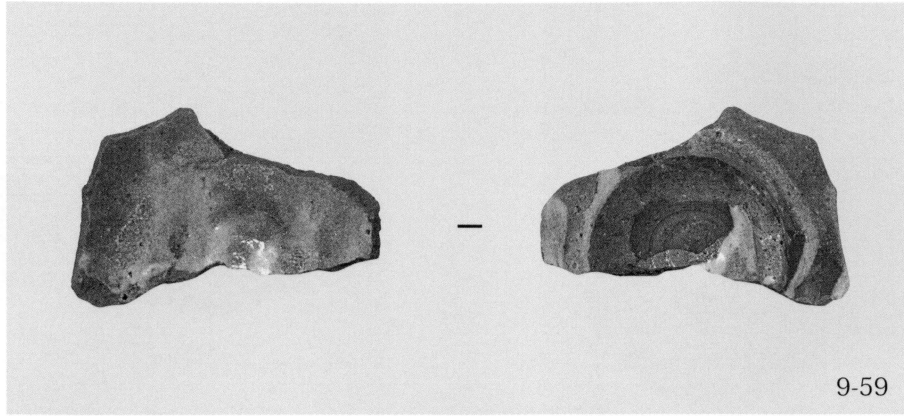
Pla.14



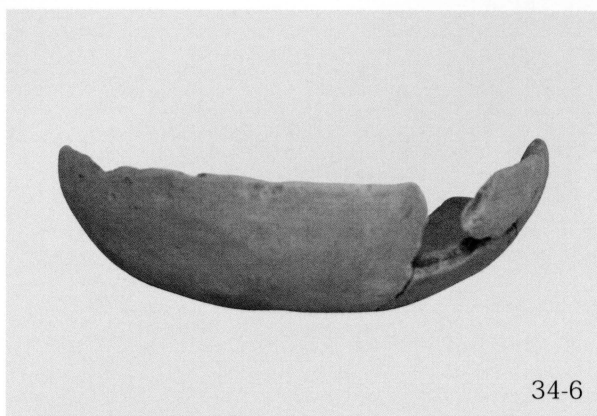
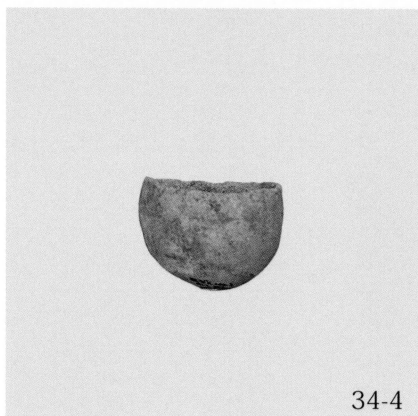
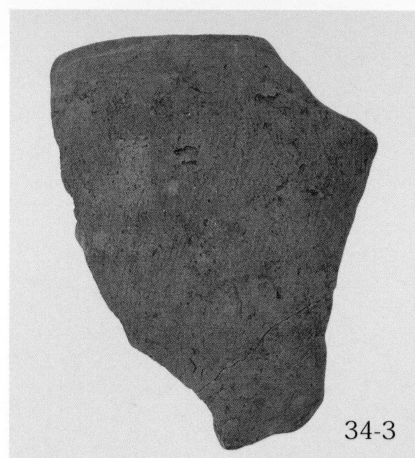
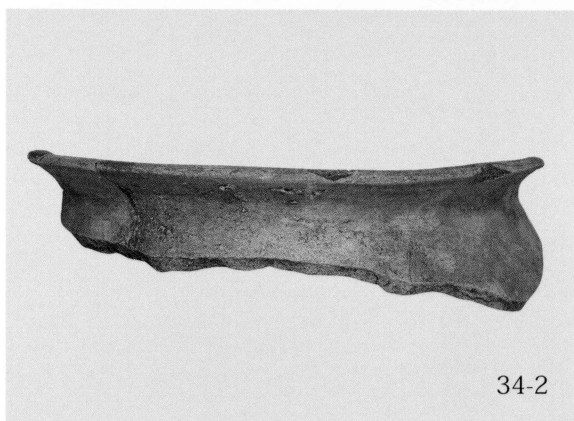
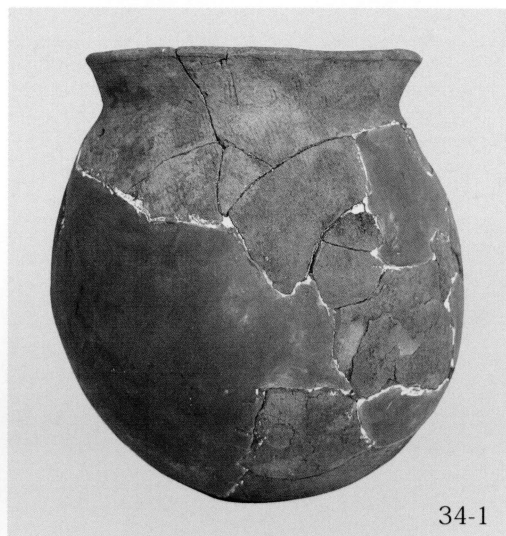
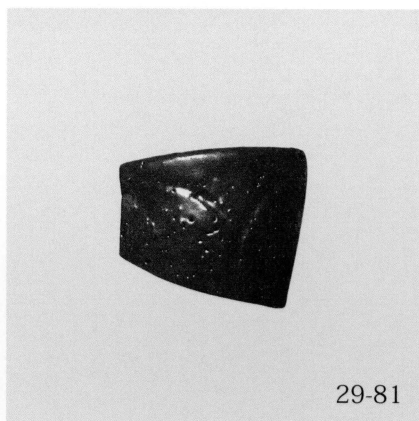
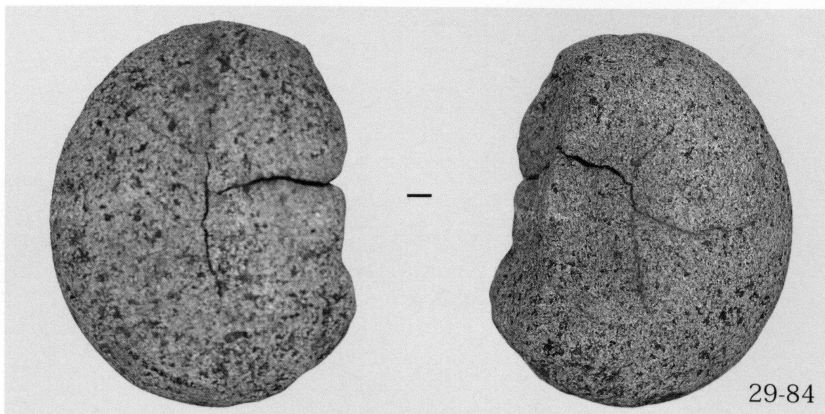
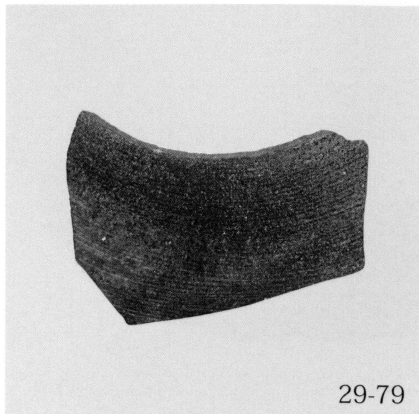
Pla.15



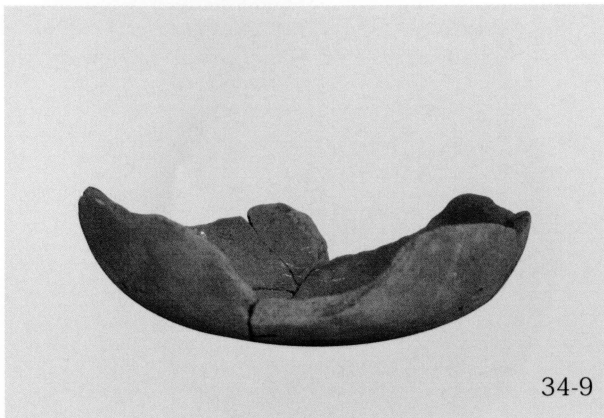
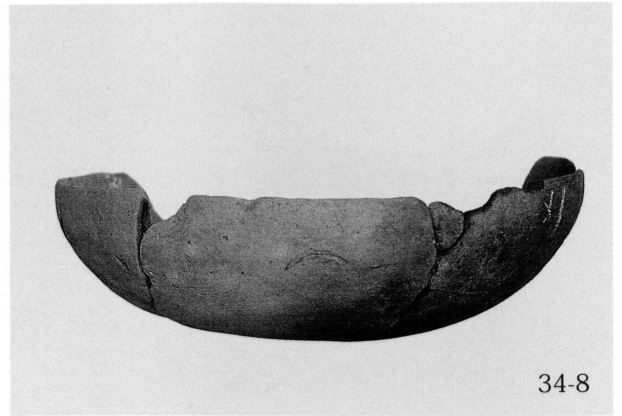
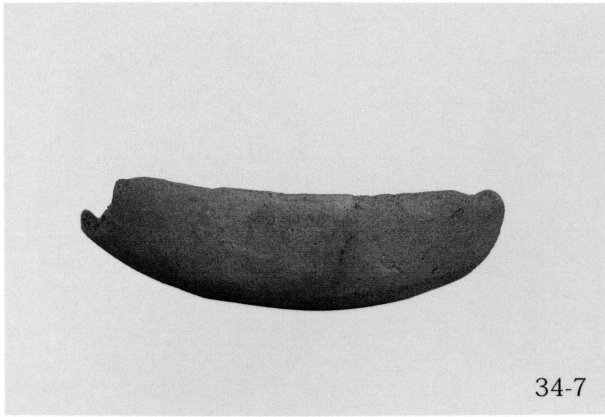
Pla.16



Pla.17



Pla.18



筑後市内遺跡群Ⅷ

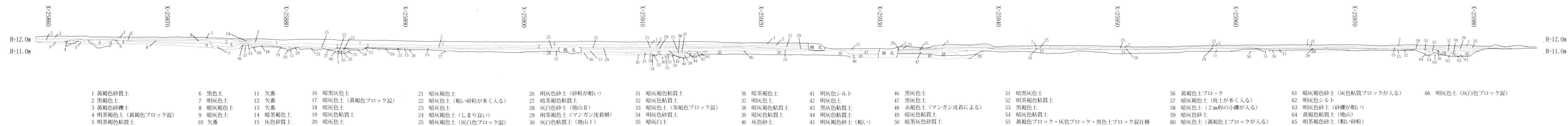
福岡県筑後市大字蔵敷・西牟田所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書

第71集

平成18年3月10日 発行

発行 筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井 898

印刷 大同印刷株式会社
佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20



- | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|---------|----------|-------------------|--------------------|-------------------|------------|------------|---------------|--------------------|------------------------------|----------------------|------------------------|-------------------|
| 1 黄褐色砂質土 | 6 黒色土 | 11 欠番 | 16 暗黒灰色土 | 21 暗灰褐色土 | 26 明灰色砂土(砂粒が粗い) | 31 暗灰褐色粘質土 | 36 暗茶褐色土 | 41 明灰色シルト | 46 黒灰色土 | 51 暗黒灰色土 | 56 黄褐色土ブロック | 61 暗灰褐色砂土(灰色粘質ブロックが入る) | 66 明灰色土(灰白色ブロック混) |
| 2 黒褐色土 | 7 明灰色土 | 12 欠番 | 17 暗灰色土(黄褐色ブロック混) | 22 暗灰色土(粗い砂粒が多く入る) | 27 暗茶褐色粘質土 | 32 暗灰色粘質土 | 37 明灰色土 | 42 明灰色土 | 47 黒灰色土 | 52 暗茶褐色粘質土 | 57 暗灰褐色土(粘土が多く入る) | 62 明灰色シルト | |
| 3 黄褐色砂礫土 | 8 暗灰褐色土 | 13 欠番 | 18 暗灰色土 | 23 暗灰色土 | 28 灰白色砂土(地山II) | 33 暗灰褐色粘質土 | 38 暗灰褐色粘質土 | 43 黒灰色粘質土 | 48 赤褐色土(マンガン沈着による) | 53 黒褐色土 | 58 暗灰色土(2mm程の小礫が入る) | 63 明灰色砂土(砂礫が粗い) | |
| 4 明茶褐色土(黄褐色ブロック混) | 9 暗灰色土 | 14 暗茶褐色土 | 19 暗灰色粘質土 | 24 暗灰褐色土(しまり良い) | 29 明茶褐色土(マンガン沈着層) | 34 明灰色砂質土 | 39 暗灰色粘質土 | 44 明灰色粘質土 | 49 暗灰色粘質土 | 54 暗灰色粘質土 | 59 暗灰色砂土 | 64 黄褐色粘質土(地山) | |
| 5 明茶褐色粘質土 | 10 欠番 | 15 灰色砂質土 | 20 暗灰色土 | 25 暗灰褐色土(灰白色ブロック混) | 30 灰白色粘質土(地山I) | 35 暗灰白土 | 40 灰色砂土 | 45 明灰褐色砂土(粗い) | 50 暗茶灰色砂質土 | 55 黄褐色ブロック・灰色ブロック・黒色土ブロック混在層 | 60 暗灰色土(黄褐色土ブロックが入る) | 65 明茶褐色砂土(粗い砂粒) | |

筑後市教育委員会 平成16年度

(株)蔵文化財サポートシステム

